

国際理解教育研修会

平成 30 年度 在外教育施設派遣教員帰国報告会
(2018 年度)



主 催 兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会
共 催 兵庫OV教員研究会 青年海外協力隊兵庫県OB会
後 援 兵庫県教育委員会 姫路市教育委員会 神戸市教育委員会

期日： 平成 30 (2018) 年 6 月 16 日 (土)

会場： 姫路市市民会館(姫路市総社本町)

はじめに

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会

会 長 足 立 浩

(篠山市立多紀小学校長)

本日、ここに「国際理解教育研修会～平成30年度在外教育施設派遣教員帰国報告会～」を開催することができました。ご多用の中、在外教育施設並びに青年海外協力隊での実践を発表いただく先生方、本研修会にご参加いただいた先生方、心より感謝申し上げます。また、日頃より兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（兵海研）の諸事業に対して、ご理解・ご協力をいただいている関係の皆様、この場を借りてお礼申し上げます。

私たち兵海研は、在外教育施設への派遣経験をもとに、国際理解教育・帰国子女教育・多文化共生教育などの取り組みを推進しています。「兵庫から良い先生を送り出そう！」そして「帰国後は海外で学んだ貴重な経験をいかそう！」を合い言葉に、在外教育施設からの帰国教員による帰国報告会や多文化共生・国際教育セミナー（派遣希望者研修会）、派遣教員への支援活動、情報交換会等の事業に取り組んでいます。

さて、帰国教員の皆さん、海外での勤務、大変お疲れ様でした。国際政治や経済が不安定な中での海外勤務は、苦労や困難が多々あったことと思います。児童生徒の多様化に関わる課題、「テロ」や「自然災害」「治安問題」「衛生問題」等安全に関わる課題など、日本では経験できない問題にも対応されたことでしょう。派遣教員の皆さんが責務を全うされ無事に元気に帰国されたこと、私たちも心から嬉しく思っています。

帰国されて約2か月半が経過しましたが、日本の学校はいかがでしょうか。激流のような慌ただしい日々で逆カルチャーショックを感じておられるかもしれません。「海外での貴重な経験を帰国後どのようにいかしていくか」というのはとても難しい問題です。帰国後すぐに、今の学校やクラス、地域でいかすことができる・・・というほど簡単なものではありません。しかしながら、教育界もまた社会全体も、先生方の経験を重視する方向に確実に進んでいます。グローバルな時代と言われる今日、多様な文化・価値観を尊重する態度や外国語・異文化への柔軟な対応力、国際的な人権感覚、自分の考えを持ち積極的に交流を図るコミュニケーション能力など、先生方が海外で身に付けられた資質・能力は、日本人全体とりわけ未来に生きる子どもたちに求められるようになっていきます。

文部科学省や兵庫県教育委員会、各市教育委員会からは、全海研、兵海研に対して「派遣経験を国際理解教育や帰国子女教育、多文化共生教育の分野でいかしてほしい」という言葉をいただいています。多くの方々の期待に応えるべく、ぜひ日々の教育をはじめ様々な場面で創意工夫しながら、海外での経験をいかしてください。

最後になりましたが、本研修会を実施するにあたり、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、姫路市教育委員会、兵庫OV教員研究会、青年海外協力隊兵庫県OB会等、多くの方々のご支援・ご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

今後とも、兵海研の諸事業にご理解とご協力をいただきますよう、よろしく願いいたします。

国際理解教育研修会

～平成30年度在外教育施設派遣教員 帰国報告会～

- 1 日 時 平成30年6月16日（土） 午前9時50分～午後5時15分
 2 場 所 姫路市民会館 4階第3会議室（姫路市総社本町112番地 TEL079-284-2809）
 3 日 程
 9:30 受付
 9:50 開会行事
 (1) 開会あいさつ
 (2) 来賓あいさつ
 (3) 事務局より
 10:20 帰国報告（1人25分）移動質疑込

時刻/会場	4階 第3会議室	
① 10:20	バンコク日本人学校	西 康滋 神戸市立長坂中学校
② 10:45	青年海外協力隊 現職参加 ティグバウアン小学校（フィリピン）	采女 由衣 猪名川町立猪名川中学校
③ 11:10	イスタンブル日本人学校	細見 隆昭 丹波市立新井小学校
④ 11:35	シンガポール日本人学校チャンギ校	高木 智子 加古川市立野口南小学校
12:00	昼食（1時間）	
⑤ 13:00	サンチャゴ日本人学校	丸岡 慶子 神戸市立宮本小学校
⑥ 13:25	青年海外協力隊 現職参加 パクセー教員短大（ラオス）	池田 拓也 西宮市立西宮養護学校
⑦ 13:50	ローリー日本語補習学校	伊井 直明 シニア派遣（香美町）
⑧ 14:15	上海日本人学校浦東校	佐々 順子 神戸市立木津小学校
⑨ 14:40	プノンペン日本人学校	藤中 寛子 神戸大学附属小学校
15:05	休憩（15分間）	
⑩ 15:20	ロッテルダム日本人学校	河田 武志 明石市立江井島中学校
⑪ 15:45	台中日本人学校	三輪 信之 神河町立神河中学校
⑫ 16:10	青年海外協力隊 現職参加 ワムム更生学校（ケニヤ）	安藤 洋之 兵庫県立香住高等学校
⑬ 16:35	リヤド日本人学校	上阪 浩一 姫路市立高丘中学校

※時間はおおよその目安です。また、都合により発表の順序を入れかえることがあります。

- 17:00 閉会行事
 (1) 閉会あいさつ
 (2) 事務局より

17:30 懇親会（会場：これや 姫路駅前店）

帰国報告書目次

(当日発表)

1	バンコク日本人学校	神戸市立長坂中学校	西 康滋	・ ・ ・ ・	1
2	青年海外協力隊 (フィリピン)	猪名川町立猪名川中学校	采女 由衣	・ ・ ・ ・	3
3	イスタンブール日本人学校	丹波市立新井小学校	細見 隆昭	・ ・ ・ ・	5
4	シガポール日本人学校 小学部 チャンギ校	加古川市立野口南小学校	高木 智子	・ ・ ・ ・	7
5	サンチャゴ日本人学校	神戸市立宮本小学校	丸岡 慶子	・ ・ ・ ・	9
6	青年海外協力隊 (ラオス)	西宮市立西宮養護学校	池田 拓也	・ ・ ・ ・	11
7	ローリー日本語補習学校・校長	シニア・香美町	伊井 直明	・ ・ ・ ・	13
8	上海日本人学校 浦東校	神戸市立木津小学校	佐々 順子	・ ・ ・ ・	15
9	プノンペン日本人学校	神戸大学附属小学校	藤中 寛子	・ ・ ・ ・	17
10	ロッテルダム日本人学校	明石市立江井島中学校	河田 武志	・ ・ ・ ・	19
11	台中日本人学校	神河町立神河中学校	三輪 信之	・ ・ ・ ・	21
12	青年海外協力隊 (ケニア)	兵庫県立香住高等学校	安藤 洋之	・ ・ ・ ・	23
13	リヤド日本人学校	姫路市立高丘中学校	上阪 浩一	・ ・ ・ ・	25

(紙面発表のみ)

14	ドバイ日本人学校	小野市立小野中学校	福本 俊也	・ ・ ・ ・	27
15	パリ日本人学校	神戸市立檜野台小学校	村上 貴士	・ ・ ・ ・	29
16	ミュンヘン日本人国際学校	西宮市立浜脇中学校	吉永 真由美	・ ・ ・ ・	31
17	モスクワ日本人学校	尼崎市こども青少年本部事務局	松田 賢	・ ・ ・ ・	33

1 バンコクの概要

タイ王国の首都であるバンコクは、東南アジアを代表する近代的な大都市で、かつては運河が縦横に走っていた水上交通の盛んな水の都であった。近年、急速な変貌を遂げ、街中には高層ビル群が林立し、運河は殆どが埋め立てられて道路となり、頭の上には高速道路やB T S高架電車が走っている。最近では地下鉄もでき、ここ10年で目覚しく変貌して今やアジアを代表する国際都市としての姿を持ってきた。一昔前は、バンコクに住む日本人といえ、企業の駐在員がほとんどであったが、今はこちらで仕事を起こしたり、地元の企業に就職したり、のんびりマイペースなロングステイを楽しむ人が増えたりと、様々な目的を持った人々がそれぞれ自分の暮らしを営んでいる。また、国際的なビジネスの拠点としての機能も果たしているバンコクは、あらゆる点において、東南アジアで有数のなる大都市となっており、今も寺院や歴史的な史跡などの伝統的なタイ文化を象徴するものが日常の暮らしに溶け込んでいる。



2 バンコク日本人学校の概要

本校は、大正15年(1926年)創立の盤谷日本尋常小学校を前身とする、世界一歴史のある学校である。戦争のため一時閉校となったが、昭和31年(1956年)にサラディーンの本国大使館内に「在タイ日本国大使館附属日本語講習会」として28人の子供たちと4名の教師により改めて開設された。その後、泰日協会の協力を得、昭和49年(1974年)に現在の「泰日協会学校」としてタイ国政府から正式に義務教育学校として認可を受けた。平成29度は生徒数2696名、教職員218名のスタートとなり世界一大きな日本人学校である。

3 特色ある教育の実践

(1) タイ語、英会話

タイ国教育省の指導により、小学部1年～中学部3年まで週1時間のタイ語の授業が義務付けられている。本校タイ語講師によるオリジナルテキストにより学習を進めている。タイ語を学びながらタイの文化・風習にも触れることができた。また、英語のネイティブスピーカーによる習熟度別による英会話の授業を行い、グローバル社会に適応できる人材育成を目指している。テキストは平成28年度より学校独自のものを使用している。

(2) 水泳指導

常夏の気候を生かし、1年を通して水泳授業を実施している。担当する教員と水泳コーチと一緒に指導することで、本校の子どもたちに高い泳力を養うことを目指している。その泳力を試す場として、小学部5年生では、臨海学校で遠泳を行っている。また、体力づくりの一環としてスポーツ大会を開催するなど、工夫を凝らした取組を行っている。

(3) キャリア教育の推進

本校中学部では、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力やしっかりとした勤労観・職業観を身につけて欲しいと考え進路啓発講演会や職場訪問学習などを行っている。職業を通して自己実現を果たしている多くの方々との触れ合いの場を設けている。中には本校出身であり現在海外で働いている先輩もおり、海外で働く身近なモデルとして将来への展望を持つこともできた。

(4) 音楽朝会

小学部の各学年で歌を歌う取り組みを披露しあい、縦の繋がりを大切にする行事である。中庭に集まった約2150人の歌声が響く毎月の音楽朝会も見所である。中学部の合唱コンクール前には、中学3年生が小学部の児童に合唱を披露するなど、小中学部の交流を行った。



(5) 体育祭

体育の授業は、児童生徒の体力促進において重要な役割を果たしている。ほぼ全ての児童生徒は、スクールバスか自家用車で登下校となっているため、歩くことが極端に少ない。またバスで一斉に下校するため、放課後校庭で遊ぶことや部活動はできない。その上に住居周辺に国内のような児童公園はなく、習い事やクラブチームで定期的に体を動かさない限り、運動する環境が極端に少ない状態となっている。その意味で体育の授業は、とても重要になっている。その成果を発表する場としての体育祭となっている。数年前まで小学部と中学部が同時に開催されていたが、来校の保護者を含め大人数となることから日程をずらして開催するようになった。



また、平成28年10月にタイ国王が崩御された関係で準備していた体育祭が中止となった。喪に服しているタイの方々の気持ちに寄り添う意向で、お祭りごとのような集団が盛り上がる行事は一切中止となった。

このため翌年（平成29年度）の体育祭は1/3の教員しか経験がなく、文書での引継ぎ事項などは残っていたものの運営方法や警備体制など改めて考え直すことになった。

4 成果

この3年間、毎年違った役割をさせていただいた。1年目は中学3年生の学級担任、2年目は中学3年生の学年主任、そして3年目は進路指導部長という役割であった。毎年、新鮮な環境で仕事のやりがい感があった。特に進路指導では全国にわたる高校とやり取りをするなど、海外にある日本人学校ならではの貴重な経験をする事ができた。学校説明会に来られる高校がSGH（スーパーグローバルハイスクール）やIB（国際バカロレア）、海外留学など戦略を練ったカリキュラムを構成していることは、とても勉強になった。多くの高校の説明会に参加することで自分自身にもグローバル人材を育成していくという視点が培われていくことが実感できた。また具体的に入試についても多くの高校と連絡をとりあった。生徒が本帰国した際に日本で居住する都道府県も様々であり、個別性が高く、保護者・生徒のニーズに対応するのは多難なことであった。その中で多くの高校入試担当の先生や教育委員会の方々と連絡を取り合ったのはとても貴重な経験であった。メールのやり取りが中心であったが、その際にも相手の人となりを伺うことができ教師・人間として手本にしたくなるような方もおられた。この役割を通して、多くの方々と出会うことができたのがとても有難い貴重な経験であった。

また日本人学校は、中学部と小学部と同じ敷地内にあり、今までほとんど知らなかった小学生の教育について身近に見ることができた。先生方も様々な都道府県から集まってきており、行事が行われる時期や構成の違い、生徒指導の違いなどがとても参考になった。学校で働くタイ人のスタッフは、学校説明会や行事の際の準備や日常的にも教師の手助けをしてくれた。誠実によく仕事をしてくれる姿勢には頭が下がる思いであった。多くの人と出会い、本当に貴重な経験となった3年間であった。

「ティグバワン小学校特別支援学級に赴任して」

猪名川町立猪名川中学校 采女由衣

1. フィリピンの外観

(1) フィリピンについて

フィリピンは7000以上の島で構成される。ドゥテルテ政権になり、今まで以上に注目を浴びるようになったこの国は、日本の約8割の面積で、人口は1億人を突破し、経済成長真っ只中の活気ある国だ。首都マニラには高層ビルが立ち並び、多くのショッピングモールが存在する。国民のおよそ9割がカトリック教徒であり、週末には多くの人々が教会でミサに参加する。9月からクリスマスの準備を始めるほど、イベント好きなフィリピンの人々の中に、宗教は根付いている。青年海外協力隊は2016年、アジアのノーベル賞と言われるラモン・マグサイサイ賞を受賞し、授賞式はマニラで盛大に行われた。現在、日本とフィリピンの関係は良好ではあるが、過去にはフィリピンの地で、多くのフィリピン人・日本人が戦争で亡くなったことを忘れてはならない。

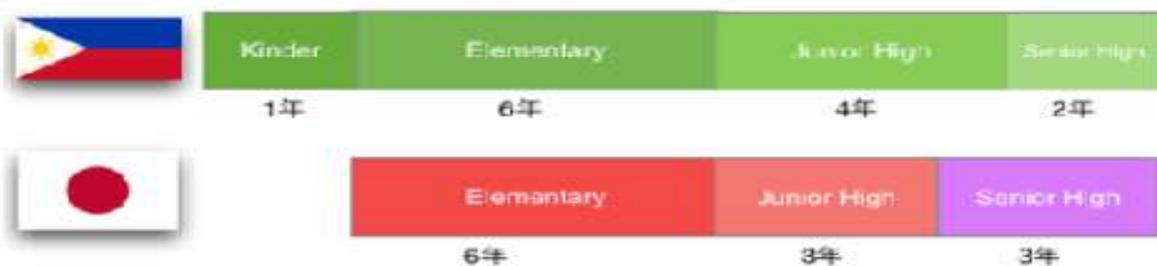
(2) 私の任地パナイ島イロイロ州ティグバワン町

私が1年7ヶ月生活していたパナイ島イロイロ州ティグバワン町は、面積83.68km²、人口58,814人(2010年)、52のバラングイ(村のようなもの)を有する町である。州都イロイロ市からジープニーと呼ばれる乗合タクシーで45分という距離にあり、港や川があるため、漁業や農業もさかんな恵まれた地域だ。1月にタウンフィエスタという一大行事が行われ、町中の人たちが各家庭で豪華な食事を準備し、近所の人たちや親戚たちと分け合う。share blessingの考え方に基づく、私も大好きな行事の1つでもある。1945年3月18日にアメリカ軍が上陸したことによって、ティグバワン町はパナイ島で初めに日本軍の統治から解放されたと言われる。3月18日には、日本軍からの解放を記念したイベントが開かれる。

2. フィリピンの教育制度と配属先

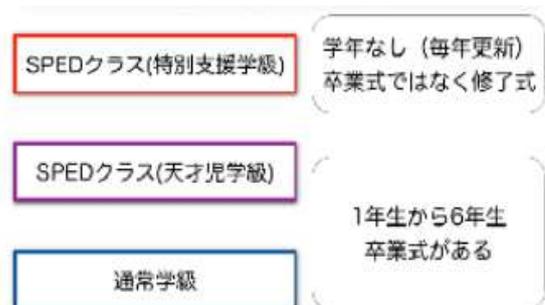
(1) フィリピンの教育制度

フィリピンでは平成25年にK-12という制度が施行され、今までの義務教育10年制から幼稚園1年を含む義務教育13年制へと変わった。フィリピンといえば、英語が共通語と思う人も多いが、実際は英語、フィリピン語、現地語の3種類を小学校から学び、授業は現地語で進めていたとしても、算数などで使う用語は英語という、いくつもの言語を使って学ぶスタイルをとっている。



(2) ティグバワン小学校特別支援学級

生徒数1800人、教員数60人という、町で最大のセントラルスクールに併設された特別支援学級に私は赴任した。フィリピンには天才児教育と障害児教育の2種類の特殊教育がある。試験を受けて成績上位の生徒たちはギフテッド(gifted)として特別クラスで学ぶことになる。天才児学級には学年制があるが、特別支援学級は生徒たちを通常学級へ戻すことを目標として設置されているため、学年制はなく、5歳から27歳までの生徒たちが学んでいた。



3. 現職としての強みを生かした活動、ボランティアとしての活動

活動の成果として、2点挙げたい。

1点目は日本の所属校の同僚に協力してもらい、交流事業を行ったことである。日本の同僚にフィリピンの小学校を訪れてもらい、水墨画の授業をフィリピン人の同僚とともに実施した。その作品を同僚が日本へ持ち帰り、日本の美術部員とのコラボ作品を完成させてくれた。その作品は日本の所属校の文化祭で展示されたのち、フィリピンへ送ってもらい、配属先の教室に展示されることになった。初めて筆を握り、墨を使って絵を描く経験をした生徒たちや同僚の嬉しそうな顔は今も私の心に残っている。2018年6月からフィリピンでは新年度が始まるが、現在もコラボ作品は教室に展示されている。



2点目は、聴覚障害や知的障害のある生徒たちがパソコン学習を行う環境を作るための「ドリームキャッチャープロジェクト」の立ち上げである。日本のNGOから寄付パソコンを導入するための輸送費を確保するために、フィリピン人の同僚と話し合い、一部の生徒とともにドリームキャッチャーという小物作りを始めた。それぞれの生徒が自分でできることで商品づくりに携わり、日本人やフィリピン人に販売し、PTAの予算とその売り上げで1台のノートパソコンを導入することができた。その後、生徒たちは授業の中でタイピングの授業を開始することができた。

4. この経験で私が学んだこと

日本で研修を含めたこの2年間はとても有益だった。ここで出会えた人たちとの時間はこれから私が生きていく上で貴重なものになると思う。ボランティアという言葉に持っていたイメージが大きく変わり、また、日本人としての自分のアイデンティティに向き合う重要な時間を与えてくれた。さらには、フィリピンの教育事情を学ぶことで、日本の教育事情について振り返ることもできた。「途上国支援を行う」という目的で任地に赴任し、赴任当初は途上国支援とは一体何なのかということに長い間戸惑い、悩んだが、1人の人間として外国に住む現地の人と関わることで、「途上国支援」というのは単なる言葉であるということに気がついた。私が参加を決めたのは自分の意志であり、外国の文化を知り、海外で生活をしたかったからである。フィリピンで私が接した人々は今の生活に満足していて、プライドを持って仕事をしている人たちばかりだった。彼らから学ぶことは本当に多かった。私が接した人たちが、私と知り合ったことで少しでも良い経験だと感じ、楽しい思いをしてもらえていたら嬉しいと思う。私は多くの影響を受け、幸せな時間を過ごすことができた。この経験をさせてくださった多くの方々に感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとうございました。



イスタンブール日本人学校に赴任して

丹波市立新井小学校 細見 隆昭

1 イスタンブールの外観

イスタンブールは、二千年の歴史を刻む文明の十字路といわれるトルコ共和国最大の都市である。東西文化の混交するエキゾチックな魅力をいたるところで感じることができる。人口は1,502万人(2017年末時点)で東京都より多い。アジアとヨーロッパを結ぶ第2ボスポラス大橋は、1988年に日本の協力により建設された。ローマ帝国、オスマン帝国などが競って建てた美しい建造物も人々を魅了する(写真1)。平均年齢は31.7歳で活気があり、古くから経済の要衝として繁栄を続けている。



写真1 旧市街地から眺めるガラタ塔

しかし、赴任当初は、ISIL(イスラム過激派組織)の邦人殺害テロ事件やシリアとの国境地帯の紛争、

PKK(クルド労働者党)のトルコ当局への攻撃が多発しており、ショッピングセンターや公共交通機関の利用が制限されていた。また、2016年7月のトルコ軍の一部によるクーデター未遂事件後に発令された非常事態宣言は現在もなお継続されており、不安定な状態が続いている。外務省の海外安全情報の危険情報もレベル1のままで、観光地で日本人を見ることは皆無であった。

ところで、トルコは親日国として知られている。トルコ人は日本人だと聞くと、「トルコ人と日本人は兄弟だ」「日本は大好きだ」と好意を持って接してくれる。両国間には、和歌山県串本町沖で69名のトルコ人乗員を救助した「エルトゥールル号海難事件」(1890年)や、イラン・イラク戦争でテヘランに取り残された日本人が救出された「イラン・テヘラン邦人救出劇」(1985年)などの印象的な出来事がある。このことは、日本の小中学校の社会や道徳の教科書、日本・トルコ合作映画『海難1890』(2016年)でも紹介されている。

サッカーは、特に人気のあるスポーツである。2018年2月にガラタサライに移籍した長友佑都は、チームのリーグ優勝に貢献し、サポーターの絶大なる信頼を得た。そのため、現在、トルコ人は日本人を見かけると親しみを込めて「ナガトモ!」と話しかけることがある。

2 イスタンブール日本人学校の概要

(1) 児童生徒数の増減が激しい

イスタンブール日本人学校は、1991年4月に児童生徒数23名で開校した。閉校になったアンカラ日本人学校やアテネ日本人学校にあった和太鼓や実験器具などの教材備品は運搬され、未だ現役で使用されている。赴任時の児童生徒数は87名で、机や教室の空きがなく、ホームページ上には全ての児童の受け入れが難しいことが記載されていた。スクールバスが足りず、ピストン運転を行っていたので、児童生徒の登下校時刻に差ができ、待ち時間の解消が課題となっていた。

しかし、現在の児童生徒数は51名と減少している。治安や経済の影響もあるが、日本人学校よりも現地のインター校を選択する保護者も多く、児童生徒数の確保が経営的な課題になっている。

(2) 直近での銃撃事件による臨時休業

2015年7月3日(金)午後4時30分、児童生徒が下校した後すぐに「パンパン」という銃撃音が聞こえ、自動小銃の「ダダダダ」という音が続いた。職員室にいた職員同士で声を掛け合い、すぐに地下室に避難した。領事館に電話連絡し、助けを求めた。避難30分後に「再アタックのおそれはない」と連絡があり、職員室に戻り今後の対応を協議した。近隣住居でマフィア同士の闘争があり、通訳が撃たれそうになり、校舎も被弾した。安全確保ができないので翌週は臨時休業となった。出席簿には「直近の銃撃事件による臨時休業(5日)」と表記した。7月12日には、近隣家屋との境に、高さ5.5m、厚さ15mmの鋼鉄製の防弾壁が設置され、1学期終業式はかろうじて実施することができた。

現校舎ではマフィアによる脅威が排除できないので、2016年9月1日に新校舎に移転した。

3 特色ある教育実践

(1) 総務省「先導的教育システム実証事業」の成果

日本の教材が入手困難なことや安全上の問題など、様々な制約を乗り越えるため、「教育クラウドプラットフォーム」を積極的に活用した。写真2は、学習者用デジタル教科書やドリル型学習教材などの最新教材で児童が学習を進めている様子である。

銃撃戦やクーデター未遂事件などの安全上の問題で休校を余儀なくされることもあったが、その際は家庭の端末からクラウド上の教材にアクセスしたり、教員がクラウド上の掲示板に課題を出して児童生徒が回答したりするといった方法で、学習に遅れが生じないように配慮した。この成果は「教育ICTガイドブック Ver.1」として広く公開されている。

(2) クラウド型校務支援システムの導入

2年目、3年目は、教務主任として、教育課程の編成及び進行管理を円滑に行い、イスタンブール日本人学校の教育活動のさらなる充実に貢献した。具体的には、これまで表計算ソフトやワープロソフトを組み合わせて、別々に処理されていた出席表、通信表、懇談会資料、指導要録を、オンライン上で一括処理できるようにした。このクラウド型校務支援システムは、日本人学校としては世界初の導入となった。サーバーを自校で構築しているシンガポール日本人学校の教務主任とも情報交換し、新学習指導要領の実施に向けての仕様も検討した。校務支援システムの導入に伴い、教員の校務処理に関する業務時間を大幅に削減することができた。

(3) トルコの教育事情を踏まえた理科実験・観察教材の開発

器具や薬品の不足という課題には、トルコでの代用品を探すことで対応した。現地スタッフと連携を深め、理科教材や薬品を整備した。また、現地校や補習校の教員からの情報を得て、トルコの教科書とカリキュラムを入手し、現地で可能な理科教育を模索した。海外でもできるかぎり実験を充実させ、「理科が楽しい」と思える授業の実現を目指した。修学旅行で訪れたトルコ最大の観光地「カッパドキア」では、児童生徒と火山灰を採取し、学校に持ち帰り、顕微鏡で分析した(写真3)。独特の景観であるキノコ岩は、雨や風が長い年月をかけて造り上げたことを明らかにした。トルコの自然を生かした教材開発を行うことができた。

4 成果(派遣教員として得たもの)

海外では現地に溶け込み、楽しみながら成功することを目標にした。日本人学校には、派遣教員よりも長く勤務している現地スタッフや現地採用教員がいる。現地のやり方や考え方を尊重し、敬意をもって接し、スタッフと良好な信頼関係を築くことを心がけた。

個人的に家庭教師をお願いし、毎週トルコ語の学習を2年間続けた。学校の警備員や運転手とトルコ語で会話し、トルコ人の考え方や物事のとらえ方を学んだ。領事館や現地校で働くトルコ人と夜間にサッカーの勝負をし、試合後にチャイ(茶)を飲みながら親睦を深めた。トルコ料理と一緒に食べ、食文化を通じて現地の人たちと関係を作ることができた。世界三大料理といわれるトルコ料理の由来や歴史も知ることができた。妻や息子はトルコ語の習得が早く、多くのトルコ人に歓待されていた。

派遣期間の3年間は、決して楽しいことばかりではなかったが、テロやクーデターが多発するトルコの厳しい生活環境や、制限された教育条件からくる困難な状況においても、全国から派遣された教員と忍耐強く協調して、職務を遂行することができた。

今後は、学校における銃撃戦やそれに伴う校舎移転の経験を踏まえた危機管理能力を日本の教育で生かしていきたい。



写真2 先導的教育システム実証事業の様子



写真3 修学旅行先のカッパドキア

シンガポール日本人学校小学部チャンギ校に赴任して

～ グローバル人材育成に求められるもの ～

加古川市立野口南小学校 高木 智子

1 シンガポール共和国の概観

日本から南西へ約5000キロメートルに位置するシンガポール共和国は、東南アジアの島国である。東南アジア諸国の中央に位置しており、チャンギ国際空港はアジアのハブ空港として機能している。

国土の面積は約720平方キロメートル（東京23区とほぼ同程度）の広さしかない都市国家であるが、人口は約561万人、人口密度は約8000人で、日

本の20倍以上である。狭い国土に多民族が共存している。永住者は397万人であることを見れば、国外からの一時的な労働者や居住者が30パーセントを占めていることがわかる。民族は中華系を筆頭に、マレー系、インド系で総人口の96パーセントを占める。内、在シンガポール日本人は約37000人（2015年度）で総人口の1パーセントに満たない。

私が着任した2015年は、シンガポールにとって記念すべき年であった。イギリス植民地支配時代を経て、マレーシアからの分離独立を果たした1965年から数えて50年目に当たる年であったからだ。諸国の要人たちが国賓として招待され、国内では盛大なセレモニーが開催されていた。1965年、シンガポールは国際連合に加盟し、建国の産声を上げた。翌年、1966年、日本との国交も樹立された。シンガポール建国の父はリー・クアンユー氏。彼の政治ビジョンに基づき、シンガポールはわずか50年の間に急速な発展を遂げた。彼は、シンガポールに経済基盤を築くこと、金融の中心地となること、また人々が住みたい国をつくること（清潔で緑豊かな街への都市計画、安全な水の確保、住宅計画、人権施策など）を標榜し、国造りに邁進してきた。その志は、現在まで受け継がれ多大な効果を挙げてきたことが、3年間居住してわかった。シンガポールは現在、世界の金融の中心の一つである。また多民族国家でありながら、それぞれの民族の宗教や文化、生活様式を柔軟に受け入れ、共存共栄を目指している。教育においても、次世代を担う子どもたちをどのように育てていくべきか、国を挙げて検討し、社会情勢に合わせて迅速に教育内容を改善していく。年々、教育費は上昇し、国家予算の約2割を占めるに至っている。これは、国防費に次いで2番目に多い額となっており、シンガポールが国を挙げて教育に力を入れていることが窺える。

こうして、シンガポールはアジアの雄として成長し、その建国のビジョンの中には、私たちが学ぶべき点がたくさんある。

2 シンガポール日本人学校とチャンギ校の概要

当地での日本人子女教育は1912年にさかのぼる。第2次世界大戦中、戦後、閉校の期間を経て、日本との国交樹立を機に1966年に日本政府予算で正式に学校が開設された。1995年チャンギ校新校舎完成により、日本人学校小学部がクレメンティ校・チャンギ校・中学部の3校体制となる。チャンギ校はチャンギ国際空港からほど近いシンガポール東部に位置する。島内中心部からスクールバスで30分から1時間をかけて通学する児童が大半を占めている。敷地総面積は44100平方メートル、広大な芝のグラウンドと体育館、プール2つ、テニスコートなどを備えている。各教室には大型画面があり、パソコンやインターネットに容易に接続でき、児童に情報を提供できる環境が整っている。また、高学年児童は、1人に1台のタブレットを貸与され、学習に活用している。



在籍児童数は949名、学級数34学級。教職員数は70名（イングリッシュスタッフ14名、外部講師6名を含む）となっている。（2017年学校要覧より）

3 特色ある教育実践

チャンギ校の学校教育目標は「持続可能な社会の担い手として、夢を抱き自らの可能性を伸ばし、豊かな国際感覚をもち世界の人々とならうとする子」としている。

中でも特筆すべきは、まず、充実した英語教育である。授業内容では、フォニックスを取り入れた指導、イングリッシュスタッフと学級担任（日本人）によるT・T、実際の社会生活で使える英語獲得のための場の設定（アクティビティルーム）など、工夫された授業展開が組み立てられている。また現地校との交流や1日ホームステイなどを通じて、児童が英語や異文化に触れる機会が設けられている。チャンギ校の英語科は習熟度別クラス編成により、個に応じた指導を徹底している。クラス編成は、学期ごとに見直されるが、児童の習熟度が客観的に判断できるよう、個人のターゲットを絞り込み、評価につなげる試みも始まった。イングリッシュレポートとして、英会話スタッフのコメントのみでなく、各技能の習熟度の評価を添えた形で家庭に知らせる仕組みである。英語教育への期待が高まる中、家庭との連携も視野に入れて英語教育を推進している。

もう一つは、「生きる力」を育むための授業改善である。チャンギ校では、体験的な学習や問題解決的な学習を通して、児童の思考力・判断力・表現力が向上することを目標としてきた。教師の共通認識のもと、授業の工夫を重ね、協同的な学習やアクティブラーニング、反転学習の指導法を取り入れて児童の学習に向かう力を育ててきた。教師は、研究授業を参考に、お互いに切磋琢磨する雰囲気もあった。児童は自由な校風の中で、自分の意見を述べ、他者の意見に耳を傾ける姿勢を身に付けていた。

6年生児童への学校評価アンケート結果（2017年度実施）によると、

- ・実際に体験したり、自分から問題を発見して解いたりする学習で、考える力や表現する力がついてきている。・・・全体の94%
- ・授業で友達と話し合いながら学習を進めることができている。・・・全体の95%

となっており、児童は主体的、対話的に学べたと自覚していることが分かった。

最後に、国際理解教育である。私がとても重要だと感じたものは、4年生から体系的に行われている歴史教育である。4年生ではナショナルミュージアムを見学し、シンガポールの建国の歴史を学ぶ。5年生では、当地に移り住み、日本人社会の基礎を築いた人々の功績を思い、心をこめて日本人墓地の清掃に当たる。望郷の念にさいなまれながら、この地に骨を埋めた人々のことに思いをはせることによって、子どもたちは日本人として世界で生きることの難しさや大切さに気付き、先達たちの故郷を大切に思う気持ちに気付いていく。6年生では、学校近くにあるチャンギミュージアムを訪れる。戦争の傷跡に大きく心を揺さぶられた子どもたちは世界の未来について考える機会をもつ。

4. 個人的な成果

英語教育においては、担当としてイングリッシュスタッフミーティングに参加したことで、専門的な指導法に触れることができた。また、現地のインターナショナルスクールやローカルスクールが取り入れている英語教育の実際も知ることができ、興味深かった。NIE（シンガポール国立教育研究所）の聴講をし、STELLAR教育について知見を深めることができたのも、自らの財産となった。また、アジアに居住することでしか感じえない日本人としてのアイデンティティの確立に私自身も気付いたことが大変ありがたかった。歴史を正しく学ぶことで、それぞれの立場や考え方を理解し、世界の中で協調できる力をつけていくことは、グローバル人材の育成には欠かせない。今後、21世紀を生きる子どもたちのために3年間の学びを生かしていきたい。

“まほうのがっこう” ～サンチャゴ日本人学校に赴任して～

神戸市立宮本小学校 丸岡 慶子

1. 赴任地の概観

チリ共和国(República de Chile)、通称チリは、南アメリカ南部に位置する共和制国家である。東にアルゼンチン、北東にボリビア、北にペルーと隣接しており、西と南は太平洋に面している。首都はサンティアゴ・デ・チレ(Santiago de Chile)。チリ中央の盆地に位置し、首都機能を有するが、国会はバルパライソ(Valparaíso)にある。南アメリカ有数の世界都市である。

チリを語る時に、「神様が世界を創られたとき、美しいものが少しずつ余っているのをご覧になって、それらを寄せ集めて一つの国を作られた。それがチリである。」という言い伝えが引用される。この言葉の通り、チリには天の恵みを受けた美しいものがたくさんある。

チリの国土の大きさは、東西の幅はアンデス山脈から太平洋岸まで平均175 km、南北の長さは約4,300 kmにもなる。この南北の長さは地球の円周の10分の1に相当し、東京からシンガポールまでの距離と同じである。

国旗は白、赤、青色の三色である。白い五角形の星は進歩と名誉、そして、国家の統一を、青は空を、白はアンデス山脈に積もる雪を、赤は独立のために戦場で流された英雄達の血を意味する。国花のコピウエは、ユリ科のつり性低木で、チリ原産の植物である。頂部の振りから紫紅色に桃色の斑紋があり、ユリに似たらっぱ状の美しい花で下向きにつける。



2. 赴任校の概要

サンチャゴ日本人学校は1982年開校、2017年に創立37年目を迎えた学校である。開校してから2度の校舎移転を経て、現在に至る。グラウンドには青々とした芝生が広がり、子供たちが元気に走り回っている。

児童生徒は45名(2018年4月現在)、派遣教員は校長を含め9名、現地採用講師5名、秘書2名、用務員2名、事務局長1名である。

3. 特色ある教育実践

(1) 学校教育目標 確かな学力と豊かな心、健やかな体をもった子どもの育成

《学校のスローガン》～明るく、やさしく、たくましく～

「さん」さんと輝く」太陽のように明るい子

「チャ」ンスを生かして共に生きるやさしい子

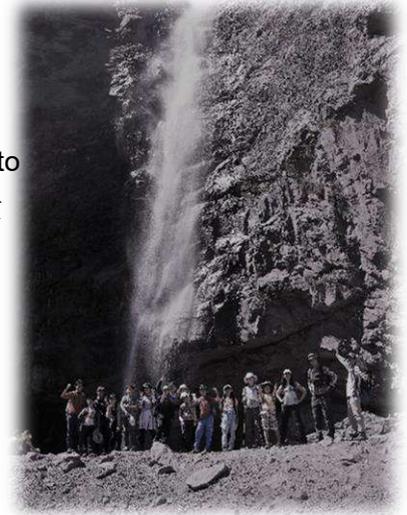
「ゴ」ールを目指しがんばるたくましい子

(2) 現地の文化・風土に触れる (現地理解教育)

- ・スペイン語会話：能力別に3クラスに分かれて、週2回、現地採用スタッフ(チリ人)から学ぶ。低学年は日常会話やゲームなどを通して、高学年は文法を中心に学ぶ。
- ・スキー教室：市内から車で1時間ほど走れば、世界有数のスキー場がある。インストラクターの指導のもと、アンデス山脈での豪快なスキーを楽しむ。(7、8月)



- ・ディエシオチョ祭：9月18日はチリの独立記念日。その時期に合わせて、チリ各地の観光名所や文化についてスペイン語劇を上演したり、民族舞踊のクエッカやボルカチレーナを踊ったり、アンティークーチョやエンパナーダなどの伝統料理を食べたりする。
- ・修学旅行：隔年実施で小学部5年生以上対象。チリ国内に2泊3日で行き、自他国のよさに気づき、豊かな国際感覚を養うことが目的。
行き先は、①Chiloé 島でのサーモンの養殖産業について、②Puerto Aisen での自然体験(氷河トレッキング)、③先住民族マプチェ族の文化と暮らしを順番に行っている。(12月)
- ・サマーキャンプ：アンデス山脈トレッキング、天文学者による南半球の星空や月の観望会、ウィンドサーフィン(1月)



(3) 学校行事の充実

- ・現地校との交流

AA校、TIPSの2校と交流。本校に児童生徒を招待して、折り紙で兜やこいのぼりを作ったり、七夕の短冊を書いて笹につけたりする体験を行った。また相手校を訪問し、スペイン語や英語で日本の習慣や食事、観光名所について紹介したり、一緒にアクティビティに参加したりした。

- ・日本の季節ごとの歳時・年中行事、伝統文化の体験

子どもの日、七夕、平和、ハロウィン、餅つき、書初め、百人一首、ひなまつりなどの集会を開催。

和楽器(箏、尺八)や和太鼓の演奏、剣道、柔道、折り紙マスタークラス、狂言、あめ細工などの体験会を開催。



(4) 日智修好120周年記念事業(2017年度)

2017年は、日本とチリの修好120周年の記念の年であった。

同年6月には東京藝術大学の藝大フィルハーモニア管弦楽団オーケストラ、チリ大統領府青年オーケストラ基金(FOJI)とモネダ宮殿文化センターで共演した。演目は幻想曲「通りゃんせ」。作曲者で指揮者の松下功氏(東京藝術大学副学長)、世界的太鼓奏者の林英哲氏の和太鼓の音色に合わせて合唱やリズム打ちを披露した。終演後は、鳴りやまない拍手に包まれた。



また、同年9月26日～10月2日の日程で秋篠宮同妃両殿下がチリを公式訪問された。本校にも来校され、歓迎の式を開催した。チリの伝統舞踊クエッカやボルカチレーナを踊り、校歌を披露した。

4. 成果

サンチャゴ日本人学校を初めて訪れる日は誰にでもある。そんなとき、在校生は歓迎会で「サンチャゴ日本人学校は“魔法の学校”です。どんなことでも、努力すれば必ずできるようになるからです。」と話をする。サンチャゴの子供たちは、その言葉を信じ、何事にも真摯に物事に向き合う。私は本当に様々な場面で、その言葉の意味を強く実感した。チリでの貴重な体験、素敵な出会いに感謝したい。

「ラオスパクセー教員短大に赴任して」

西宮市立西宮養護学校 池田拓也

1. ラオスの概要

ラオスはインドシナ半島の中央に位置する、周囲を中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーに囲まれたASEANで唯一海を持たない国である。日本の本州と同程度の約24万km²の国土に、埼玉県や千葉県と同程度の約650万人が暮らしている。国土の約80%、特に北部は山岳地帯で中国の桂林にも似た特徴的な形の山々が並ぶ一方、首都ビエンチャンから南部にかけては、川幅の広がったメコン川沿いに平野が広がり、稲作等が行われている。季節は、4月から5月にかけての暑季、6月から10月にかけての雨季、11月から3月にかけての乾季に分類される。暑季の最高気温は活動先のパクセーでは約40℃に達し、日差しが肌に刺さるような日が続くが、日に1、2度のスコールがある雨季に入ると日差しも和らぎ、乾季には最低気温が約15℃にまで下がり、連日、日本の秋晴れのような爽やかな日々が続く。



2. 活動先の概要

(1) 配属先について

活動地域はラオスの南部にあるチャンパサック県のパクセーである。パクセー市はラオスでは首都ビエンチャンに次ぐ第2、あるいは第3の都市と言われており、南部における中心的な町となっている。活動先であるパクセー養成短大はラオス南部4県をカバーし、地域の教員養成及び現職教員のグレードアップ研修の実施を担っている。初等教育、理数科、文学・社会科学、外国語の4学部を有する。自分が活動した理数科学部の生徒は約120名、教員数は約30名であった。

(2) 活動の状況

①授業を行う

活動してすぐに大学の理数科学部数学科の生徒に対して、中学校の数学内容の計算テストを行った。その平均点は約40%であり、大学生の数学の学力の低さを感じた。将来、生徒達は教員になる可能性があるため、生徒達の数学の基礎学力を向上させるため、大学生に対して直接授業を行うことを決めた。大学の数学の授業のカリキュラムに関して、基礎から学力をステップアップできるようなカリキュラムでは無く、生徒の学力の実態と合っていなかった為、数学教師と話し合いを行い変更した。100分授業を週2回行った。100分の授業では数学の計算に関する授業以外にも、日本の数学を使った活動やゲームを毎回紹介した。数学の計算に関する授業では、単元の最初と最後に小テストを行い、自分の学力がどれだけ変化したのかを実感させた。間違え直しをする習慣が無かったため、生徒それぞれにファイルを作り毎回チェックした。小テストや授業で使ったプリントをファイルに綴じて、間違えた問題は確実に直すよう指導した。2つの学期（4年生と1年生）を同様の方法で教えたが、いずれも学期前のテストより、学期後に行ったテストでは約30%向上していた。ラオスには計算



に関する問題集がないため、自分が授業で使った計算問題を問題集にして、大学の数学科の先生達に渡すととても喜んで授業で何度も使っていた。また、ラオスでは日本で紹介されるような数学を使った活動やゲームが無い為、そのような授業を行うと教員養成短大の先生や生徒は大変興味を持っていた。大学の先生達は自分の授業を見に来て、授業で実践していたり、生徒は教育実習で使いたいと写真を撮ったり、ノートに写したり、質問しに来たりしていた。

②同僚教師の授業補助を行う

ラオスの授業は教科書をそのまま伝えるという形に近い。教員養成短大の授業でも、生徒の理解を高めたり、興味関心や思考力を高めるために授業の工夫をするという考えはほとんどないように感じられた。そして、大学の先生自身が授業で教える内容を理解していないことが多く、ただ黒板に教科書を写しているだけの授業が多く見られた。そして、何より授業をしている先生達が楽しそうに授業を教えていないし、生徒も楽しそうに授業を受けているようには思えなかった。そこで、同僚の数学教師の授業の見学に行き、授業前と授業後に話し合いを行った。話し合いでは上手く伝わらないことが多かったため、自分が授業で見本を見せて、同僚教師が真似をしてもらうことも何度か行った。生徒が解けて、嬉しそうにしていたり、数学を使った活動やゲームで生徒が楽しそうにしている姿を見ると、同僚教師は今までとは意識が大きく変わり、分かりやすく楽しい授業をしたいからどのようにすれば良いのかと質問をしてくれるようになった。



③レッスンスターディーの取り組み

パクセー教員短大では日本の授業研究であるレッスンスターディーを取り入れていた。タイのコンケン大学と連携しながら、研修を行い互いの活動状況を共有し合ったり、日本の大学もパクセー教員養成短大と連携して研修を行ったりしていたので、それらの研修に参加した。そして、パクセー教員短大では月に3回程度、大学の附属小学校で算数の授業を使って実践を行っていた。授業前にレッスンスターディーの大学のグループが集まり、学習指導案を作成し、授業を行い、事後検討会が行われるという流れでそのメンバーの一人として参加していた。それにより授業が大きく改善したとは言えないが、日本やタイの教科書を用いたり、グループ学習などの授業形態を用いたり、授業の指導方法の幅は広がっていたように思えた。

3. 活動を通して得られたこと

教員養成短大での活動に関しては、算数、数学の基礎的な学力の大切さを痛感した。ラオスの学校は田舎に行けば教師が不足していたり、教科書が不足していたり、就学率も高くなく、様々な理由で算数や数学の学力が定着していない学生が多くいる。算数、数学の学習に関して、基礎から学力を定着させていくことの大切さを知った。そして、幸せの価値観が日本とは違うことを感じた。ラオスではアウトでのんびりと生活していて、人とのつながりをとても大切にしている。授業より、家族や友人のパーティーを優先させていたり、仕事が午後からあるのに昼から飲み会をしていたり、最初は戸惑うことは多かった。しかし、ラオスでのこのような生活はとても楽しく心が温かくなった。このような幸せもあるんだと実感できたことは非常に大きかった。

ローリー (Raleigh) 校に赴任して

～国際化の進展に伴う「補習授業校」の重要性～

ローリー日本語補習学校 前校長 伊井 直明

はじめに

2015年4月より2017年3月まで、アメリカ合衆国ノースカロライナ州ローリー市にある「ローリー日本語補習学校」へ文部科学省より校長として派遣され、教育内容の改善に携わった。約10年前バンコク日本人学校で管理職として勤務し在外教育施設の運営経験はあったが、補習授業校の運営は実にダイナミックで創造的なものであり、補習授業校の重要性を再確認するものであった。

1 赴任地・赴任校の概要

ローリーは近隣のダーラムやチャペルヒルと共に、リサーチ・トライアングルと呼ばれる都市圏の中心都市として発展してきた。「トライアングル」という名はローリーのノースカロライナ州立大学、ダーラムのデューク大学、およびチャペルヒルのノースカロライナ大学の3つの大学に由来している。ローリー都市圏とダーラム・チャペルヒル都市圏の2つを抱え、11郡にまたがるこの広域都市圏は約1,91万の人口を抱えている。特に力を入れている産業分野としては、情報技術・通信機器、コンピュータ/ビデオゲーム、機械工学、航空機産業、高度医療、生命工学、薬学および繊維産業が挙げられる。学校は4歳～17歳までの児童生徒約230名が在籍。幼稚部(2学級)、小学部(6学級)、中等部(3学級)、高等部(2学級)で構成され、文科派遣校長1名、現地採用教員15名、事務局員2名の体制。年間授業日39日、192時間授業(国語・数学・社会)、儀式的行事(入学式、始業式、卒業式) 体育的行事(運動会)、安全的行事(避難訓練:火災・トルネード、不審者)、校舎は名門女子高の一部を借用、帰国生・永住生の割合は、約7:3で年々永住生が増加している。

2 補習授業校とは

補習授業校とは現地の学校や国際学校(インターナショナルスクール)等に通学している日本人の子どもに対して、現地校等の建物を借用して土曜日や放課後などに国内の小学校又は中学校の一部の教科について日本語で授業を行う教育施設である。国語を中心に、施設によっては算数(数学)、理科、社会等を加えた授業が国内で使われている教科書を用いて行われている。国語やその他の基幹教科を日本語による授業を受けることで日本語能力が維持・伸長される。また、補習授業校で日本の「学校文化」に触れることでも再び日本国内の学校に転入した際にスムーズに適応できる。

世界各地域の施設と在籍者数は、平成27年4月15日現在、補習授業校は世界52カ国・1地域に205校が設置されており、義務教育段階の子どもたち約2万人が学んでいる。(【表1】参照) その数は日本人学校在籍数とほぼ同じであり、海外に在住する日本人の子どもたちに日本国民にふさわしい教育を行っている重要な教育機関であるにもかかわらず、国民の補習授業校への理解は日本人学校ほどに理解されておらず、その名称すら知らない人も多くいる。

日本人学校、補習授業校の在籍者数を地域別にみれば、アジア地域においては、日本人学校で学ぶ子どもたちは16,211人で日本人学校在籍者の78.6%を占めている。また、欧州、北米地域等に在住する子どもたちの日本人学校在籍率は以下の通りである。欧州地域12.7%、北米地域2.7%、大洋州地域0.7%。つまり、アジア地域に在留する日本人の大多数の子どもたちは日本人学校で学んでいると言える。一方、補習授業校をみると、北米在籍者数13,500人は全体の67.9%、欧州在籍者4,179人は21.0%となっている。補習授業校在籍者の約90%は北米、欧州地域と言えるのである。アジア地域の補習授業校在籍者1,465人は全体の7.4%でしかない。

これらのことから、在外留日本人の子どもたちの就学は北米地域や欧州地域は補習授業校に、一方、アジア地域では日本人学校であると言える。

【表1】

地域	補習校数	在籍数	日本人学校数	在籍数
欧州	64	4,179	21	2,627
アジア	21	1,465	36	16,211
中東・アフリカ	11	161	11	441
北米	88	13,500	4	549
中南米	9	172	14	641
大洋州	12	417	3	146
合計	205	19,894	89	20,615

※平成27年4月15日「外務省在留邦人子女数調査」より作成

※補習授業校については、政府援助を受けているもののみ掲載

3 国際化と補習授業校の子ども達の能力

(1) 国際化と教育の方向性

国際的な相互依存関係がますます深まっている中、地球環境問題、エネルギー問題、難民問題など地球規模の課題が深刻化しつつある。これらの課題の解決に当たっては国際的な協調が不可欠となり、国際社会に生きているという広い視野を持つとともに、国を越えて相互に理解し合うことがますます重要なこととなっている。国際化の進展は人と人との相互理解・相互交流が基本となるものであり、教育の果たすべき役割はますます重要になってくる。このような状況下、教育は次の点に留意して教育をすすめることが必要である。

- ①異文化理解、それを尊重する態度、異文化の人々と共に生きていく資質や能力の育成
- ②日本人として、また、個人としての自己の確立
- ③国際社会において相手の立場を尊重し、自分の考えや意思を表現できる力やコミュニケーション能力の育成

(2) 補習授業校の子どもたち

補習授業校で学ぶ子どもたちには、前述した国際社会に生きる資質や能力が既に育まれている。子どもたちは現地の生活習慣の中で現地の言葉を使って学習し、学校生活や社会生活をおくっている。正に自分たちとは異なる文化（異文化）の中での日常生活であり、学校生活である。彼らは現地校で「言葉の壁」に悩みながら友人との良き関係を築こうと努め、そのことを通して異なる文化をもった人々と共に生きていくことの大切さを日々「体得」している。一番楽しい時間であるランチタイム、母親が愛情を込めつくったお弁当に入っていた「海苔を巻いたおにぎり」を正に食べようとしていたその時、「ブラックボール」を食べる変な日本人と現地の子どものたちにはやし立てられショックを受けた小学生の体験は、自分がこの国では異なる文化を持つ人間だと自覚させられるに十分な出来事である。子どもたちはこのような強烈な経験を補習授業校において日本語で語り合うことで共感し合い、自分が日本人であるという自覚を一層深め、現地の子どものたちとの良き関係を再構築しようと月曜から取り組むのである。異文化に触れる密度は補習授業校の子どもたちと日本人学校の子どものたちとは雲泥の差がある。日本人学校は、日本の学校を数千キロ水平移動させた空間であり、日本人学校は異国に在っても「日本の空間」でしかない。そこで学ぶ子どもたちには異文化の中で悩み苦しみ、自分が日本人であると強烈に自覚する補習授業校の子どもたちのような体験は格段に少ないのである。補習授業校に通う子どもたちは国際社会で求められている異文化理解やそれを尊重する態度、共に生きていこうとする資質や能力、そして、外国語能力の基礎や表現力、コミュニケーション能力、さらには、日本人としての自覚が既に育まれているのである。

4 教育課程・指導方法の改善

教育課程の変更を強く決意させたのは、「日本人なのに日本史の知識が全く皆無であることです。時々日本の歴史を現地校の先生に聞かれることがあるのですが、何と答えたらいいのかさっぱり分からないのです。私は小学4年生途中で来たので日本の歴史はもちろん、都道府県も習う直前だったので北海道くらいしか知りませんでした。世界史は知っているのに日本史を知らないとは、日本人としていささかどうなのでしょう。」という中学部3年女子生徒の作文であった。

補習学校の設置理念は、帰国後の日本の学校教育への適応を目指すことと、日本文化の理解のための素地の育成を目指すことの2点である。歴史や地理などは民族の文化、アイデンティティーそのものである。これらの学習無くして「日本文化理解のための素地の育成」は困難である。補習校でしか学ぶことのできない学習内容、それこそが補習校の教育課程でなければならない。なぜなら、現地校では日本史や日本の地理は決して教えないのだから。一方、指導方法においては効率的で核心的な指導が希薄だったので、次の2点を指導した。**1点は、コンピュータの活用**である。PowerPointを使った授業を奨励し、授業の効率化と視覚に訴える教材作成を推進した。併せて、2016年度総務省「教育クラウド事業」に参加（北米でたった4校しか参加していなかった）し、デジタル教材を一層充実させた。**2点目は「評価規準の徹底」**である。「評価規準」という言葉を初めて聞く教員がほとんどであり、多くの教員は「評価基準」の事だと勘違いしていた。国立教育研究所作成の『評価規準の作成・評価方法の工夫改善のための参考資料』を参考にし、授業改善を図った。補習授業校の児童生徒の学習理解の個人差は「国語」において著しい。同じ学年であっても読解力、表現力に大きな差がある。このような状況下、教員が各学年の表現力等の目標やその到達の具体像を大まかにも把握し、指導に当たったことは大きな効果をもたらした。それは毎年作成している「作文集」に反映された。

おわりに

補習授業校の子ども達は今後の我が国の発展を支える「国の宝」である。しかし、教育施設や子どもたちへの国民の理解と政府の支援は不十分と言わざるを得ない。一層の理解と支援が必要である。

上海日本人学校浦東校に赴任して

神戸市立木津小学校 佐々順子

1. 赴任地の概観

上海は中国東海岸の中心部に位置し、中国最大の商工業都市のひとつである。上海市は、常住人口は2400万人を超えており、世界第6位を誇る。世界から人が集まる国際都市であり、上海市に在住する日本人は、短期滞在者を含めると10万人以上といわれる。日本食のレストランやスーパーも多数あり、日本に興味をもっている中国人も多くいる。

2. 赴任校の概要

上海日本人学校は日中国交正常化の3年後、1975年に上海日本人学校補習校として歩みを開始し、その後1987年に上海日本人学校として61名の児童生徒で虹橋校が開校した。浦東校は虹橋校の児童数が増大し、受け入れ困難になったため、新しく上海市浦東地区に設置された日本人学校である。2011年には世界にある日本人学校の中で唯一の高等部が開校し、2017年には小学部・中学部・高等部が一つの校舎にまとまり、12学年の児童生徒が同じ校舎で学ぶこととなった。



浦東校は今年で13年目を迎え、平成30年4月現在で小学部児童数は590名、中学部生徒数は415名、合計1005名と、日本人学校世界第2位の大規模校である。人工芝とタータントラックのグラウンド、屋内プール、2つの体育館、大きな図書館、全教室にパソコン・固定プロジェクター完備など設備が整っており、児童生徒は快適に学校生活をおくることができている。校訓は「独歩博愛」。日中の懸け橋となる子どもたちを育てようと、国際性豊かな児童生徒の育成を目指している。

3. 特色ある教育実践

(1) 現地校交流

現地理解教育の一環として、小中全学年で年に1回、上海の現地校と交流する機会を設けている。交流方法としては、現地校へ訪れる「訪問」と現地校児童生徒に来てもらう「招待」があり、どちらも経験できるように、隔年で設定されている。交流内容は、小学部3年生（招待）を例に挙げると、現地校の児童に「あやとり」「折り紙」「縄跳び」を教えて一緒に活動し、交流する。現地校の児童は、そのほとんどが日本語を話せないのので、日本人学校の児童が中国語や英語で話し、コミュニケーションを取り、交流を深める。「訪問」の場合は、現地校の代表児童が中国語の歌や武術を披露してくれることが多い。どちらにしても、互いの国の文化を知り、理解することができる貴重な機会となっている。



(2) ネイティブ講師による英会話と中国語の授業

小中全学年で、週に一時間ずつ、ネイティブ講師による英会話と中国語の授業がある。小学部では、英会話は2クラス、中国語は習熟度別に6クラスに分けられて学習している。英会話はネイティブ講師が主導で、全て英語で授業が行われ、担任がT2の形で授業に入る。中国語は習熟度によるが、半数以上のクラスで8割以上中国語を使った授業を行っている。日本で生活しているよりも、日常生活で中国語や英語を耳にする機会の多い児童生徒にとって、とても重要で意欲的に取り組める授業である。また、一般的な参観日の他に「語学参観日」が設けられており、保護者も語学学習が行われている様子を見る機会が多くある。

(3) 副読本「わたしたちの浦東」「日中の懸け橋となった人々」

どちらも上海日本人学校の教職員が、現地理解教育推進のために作成し、定期的に改正しているものであり、社会科や道徳、総合的な学習の時間で活用されている。「日中の懸け橋となった人々」では百人一首にも出てくる阿倍仲麻呂についても紹介されており、その資料を活用した授業や百人一首大会などが行われる「阿倍仲麻呂週間」も小中で設定されている。



4. 成果（派遣教員として得たもの）

(1) 「貫く」と「認める」、見聞の広がり

日本人学校には日本全国から教員が集まってきており、中には教員以外の社会人経験者も多くいる。自分が今まで当たり前だと思っていた教育も、他の都道府県では行われていなかったりやり方が違ったりと、同じ日本だがカルチャーショックを受けることは多くある。その中で、「こだわって自分を貫く場面」と「相手を認めて合わせる場面」の両立がとても大切だと感じた。こだわってばかりだと協調性を失いチームとしての力を発揮できず、人に合わせてばかりだと自分を見失い得るものが少なくなる。どちらかに偏りが出るとは、本来大切にしなければならない児童生徒への教育に支障がでることを実感した。大規模校であればあるほどチーム力が必要とされ、いつでも「子どもたちのために」という気持ちが大切であると改めて感じた。

(2) 危機管理の重要性

海外で生活するという事は、日本とは違って予想していないようなことが起きることがある。通学ひとつをとってみても、日本だと児童生徒だけで登下校するのが当たり前だが、上海日本人学校ではバス通学や親が学校に送り迎えする個人通学などがある。その全てが、保護者の責任のもと行われているものであるが、学校としても児童生徒の安全を守るために、あらゆる事態を想定し、先手を打っていく必要がある。そのために、管理職をはじめ経験豊富な現地スタッフとの話し合いや意見交換は必要不可欠である。交通ルールも現地の人々の感覚も日本とは違う分、現地の法律や文化をきちんと理解し、対応にあたるのが大切だと感じた。

(3) 感覚の「相違」と「共通」する部分

日本人学校が小中併設校であることや、赴任一年目に中学部1年生の担任をさせてもらったこともあり、中学校教育や中学校教員の考えを間近で体感することができた。自分自身が日本にいるときに感じていた小学校と中学校の間にあるギャップは、相手の校種への理解の低さがもたらしているものだと感じた。小中で児童生徒が目標とする姿には相違点があり、逆に変わらない共通点もある。自分自身が感じた小中の共通点は、「児童生徒が主体的に活動することを大切にする」こと。相違点は「受験を見越した教科指導」である。当たり前のようなものであるが、中学校では受験が常にすぐ隣にあることを意識して指導しなければならないため、小学校と中学校とでは授業展開にも大きな違いが出てくる。その中で感じたことは、小学校の間に基礎基本の定着をすることと、多様な考え方ができるように指導することが大切だということだ。自ら考え、問題解決をしていく力は、必ず必要になる。校種ならではの相違点がある反面、道徳では指導方法に共通点が多くある。浦東校では小中合同の職員研修を道徳で行っていたため、お互いの校種の授業を見合い、参考にできるところは柔軟に取り入れていくことができた。何事においても互いを理解しようとする態度が大切だと感じた。

エネルギーに満ち溢れた教員集団や、様々なバックグラウンドを持つ児童生徒と過ごした3年間は大変貴重な経験となり、一生の財産となった。

1. カンボジア王国（首都プノンペン）の概要

カンボジア王国（通称カンボジア）は東南アジアのインドシナ半島南部の立憲君主制国家で ASEAN 加盟国である。南はタイランド湾に面し、西はタイ、北はラオス、東はベトナムと国境を接する。国民の90%以上が、クメール語（カンボジア語）を話し、仏教（上座部仏教）を奉ずるクメール人（カンボジア人）である。

カンボジアと言えばよく知られているのが内戦である。フランスからの独立後、南北に分断された隣国ベトナムでベトナム戦争が始まるとカンボジア国内も不安定化し、アメリカ合衆国と南北ベトナムの介入によってカンボジア内戦が勃発した。1968年にはアメリカ軍の空爆が始まり、1970年には親米派のロン・ノル将軍がクーデターによりシハヌーク国王を追放し、クメール共和国を樹立した。

1970年のクメール共和国成立後、内戦は一層激化した。アメリカ軍による空爆がカンボジア全域に拡大され、数十万人が犠牲となると、反米を掲げるクメール・ルージュ勢力の伸張を招いた。更に、ロン・ノル将軍によるクーデター後、北京に亡命していたシハヌーク元国王も亡命先でカンプチア王国民族連合政府を樹立し、かつて敵対していたクメール・ルージュと共にロン・ノル政権を打倒する方針を打ち出していた。1975年4月17日、極端な共産主義を掲げるクメール・ルージュのポル・ポト書記長がクメール共和国を打倒し、民主カンプチアを樹立した。クメール・ルージュの権力掌握から1979年1月6日の民主カンプチア崩壊までの3年8カ月20日間のポル・ポト政権下にて、原始共産制の実現を目指すクメール・ルージュの政策の下、旱魃、飢餓、疫病、虐殺などで100万人～200万人以上とも言われる死者が出た。この死者数は、1970年代前半の総人口は700～800万人だったとの推計の13～29%に当たり、思想改造の名の下で虐殺が行われた。教師、医者、公務員、資本家、芸術家、宗教関係者、その他良識ある国民のほとんどが捕らえられて強制収容所に送られた。生きて強制収容所から出られたのはほんの一握りであった。それ故、正確な犠牲者数は判明しておらず、現在でも国土を掘り起こせば多くの遺体が発掘される。

その後、様々な国からの支援を受け、民主選挙を実施したり、ASEANに加盟したりするなどし、カンボジアは復興と発展の道を歩んできた。2012年にはGDP成長率7.3%を記録し、経済成長も著しい。近年は日系企業のカンボジア進出も加速しており、JICAの経済特別区整備などハード面、産業人材育成などソフト面の包括的支援が、こうした経済活動にも貢献している。しかしながら、乳児死亡率などの開発指標は、依然としてASEAN諸国の中でも低位にとどまっている。また、カンボジアでは、クメール・ルージュ時代にほとんどの法律家（裁判官、検察官、弁護士）が殺害され、法律及びその資料も廃棄された。カンボジアが近代国家として再生、発展していくためには、0に近い状態から民法や民事訴訟法などの基本法典を整備し、それらを運用する裁判官、弁護士などの法律家を育成することが不可欠であり、日本はこれらの法整備支援も行っている。

2. プノンペン日本人学校の概要

プノンペン日本人学校は、カンボジア日本人会のもと、カンボジアの首都プノンペンにおいて平成27年（2015年）に開校したカンボジア初の日本人学校である。カンボジアの教育・青年・スポーツ省からカンボジア国教育法に基づく学校としても認定を受けている。初年度は、全校児童生徒数21名、派遣教員7名・現地採用教員5名・事務員2名でスタートした。

3. 特色ある教育実践～子どもの主体性を育む現地理解教育～

(1) 現地校との交流

プノンペン市内にある現地校との交流を毎年定期的に行っている。小学部は公立小学校と、中学部は公立中学校と交流している。交流会が近づいてくると、現地校の子ども達と仲良くなるにはどんな活動をすればいいか、どんな流れで会を進めたらいいかなど、子ども達が中心となって話し合い、その詳細を決めて取り組んでいる。過去の交流を振り返ると、小学部の現地校交流では、現地校へ赴き、日本の子ども達がよく知る日本の遊びを現地の子達に紹介して一緒に遊んだり、日本人学校で学習したクメール語での自己紹介をして自分のことを伝えたりする活動を行った。中学部では、日本人学校での文化祭に現地校の子ども達を招待してさまざまな体験活動を一緒に行ったり、現地校に赴いて、これまでの学習で調べて分かったカンボジアのことをプレゼンして意見交流を行ったりしてき

た。

実際の交流会における子ども達は、現地校の子ども達と英語やクメール語を駆使した円滑なコミュニケーションをとるまでには至らなくても、身振り手振りで思いや考えを伝えようとしたり、つたない英語やクメール語の単語を使って説明したりするなど、遊びやゲームなど体験活動を通じて関わりを深めていた。交流会の最後になると、別れを惜しむ子ども達が手を振り合ったり、お互いの名前を呼び合ったりする姿が見られた。単発の交流で終わるのではなく、年間を通して、そして毎年の学習・行事として行うことで、日本人学校と現地校の子ども達の関わりを深め、系統的・発展的に交流を重ねていくことを目指している。

(2) カンボジアの名産品“ココナッツ”を学習材とした単元開発～小学部3年生「総合的な学習の時間」での取り組み～

子ども達が生き生きと学習する子ども主体の「総合的な学習の時間」を目指して、子ども達と話し合いを重ねながら、「Discover!

Frontier! Mamma Mia! ～魅力発見! カンボジア～ココナッツのひみつを見つけ、JSPPのみんなにフリーペーパーでつたえよう」という単元を開発した。単元名には、「あまり知られていないようなもの・いちばん新しいもの・今までその魅力に気づかなかったもの

(Frontier)を、発見したり調べて気づいたりして (Discover), 自分たちも含めたほかの人たちを驚かせる (Mamma Mia) 総合的な学習の時間にしよう」というメッセージを込めている。本単元は3次構成で、第1次「ディスカバー・カンボジア～わたしたちの課題を見つけよう～」で単元全体の見通しを立てた。続く第2次「すがたをかえるココナッツ～ココナッツオイル作り～」で、五感を刺激するココナッツオイル作りという体験活動を軸とした学習に取り組んだ。そして、単元

のまとめとなる第3次「ココナッツのひみつ教えます～フリーペーパー『DFM(ディー・エフ・エム)』発行～」では、ココナッツオイル作りを通じて見つけた、ココナッツやオイル作りのひみつ(ひとつのココナッツからさまざまなものに姿を変えて昔から人々の生活の中に取りこまれていること・ココナッツからオイルを取り出すまでに大変な手間暇がかかること・オイルからさらに姿を変えて生活に利用することができること・カンボジアの人々にとってココナッツが身近な存在であることなど)を、フリーペーパー『DFM』を発行して学校のみんに伝えるというこれまでの活動や学習を活用する形の学習に取り組んだ。子ども達の見線から単元全体を見つめると、子ども達にとっては大きな課題が2つあった。1つ目は自分達で完成させるココナッツオイル作りで、2つ目はフリーペーパーの発行である。ココナッツオイル作りを手段としてフリーペーパー発行という目的の達成に取り組むという構図の単元学習とした。

初めてのオイル作りに失敗したとき、「このままだとフリーペーパーに載せる内容がオイル作り失敗になってしまう」「ココナッツがオイルに変身するひみつを伝えられない」「成功するまで続けなければフリーペーパーを発行する意味がない」といった言葉が聞かれた。実際、フリーペーパー発行の段階に入ると、地道な作業が長く続いたが、子ども達は最後まであきらめずに、楽しみながら取り組んだ。フリーペーパー発行の作業期間中、学習発表会があったため、フリーペーパーの宣伝もかねて、ココナッツオイルの作り方やオイルを使ったバームの作り方をチラシにして配ったり、それまでの取り組みから分かったココナッツにまつわる“ひみつ”をプレゼンしたりもした。学習発表会で取り上げたのも、子どもたちからの強い要望からである。

4. 成果

子ども主体の現地理教育では、自分以外の他者と通じ合うための体験的な表現活動を介して現地を知る・現地に触れる経験が有効である。そこから、自分は他者との関わりの中で生きていることや、他者との関わりの中で生きられることを、子ども達が感じられるように目指すことが大切だと考える。現地校との交流や、カンボジアの名産品であるココナッツを題材として学習を通じて、子ども達はカンボジアに愛着を持ったり、カンボジアの良さを感じ取ったりすることができたように思う。日本人学校の子ども達には、カンボジアと日本をつなぐ架け橋として、今後の活躍を期待したい。



ロッテルダム日本人学校に赴任して

明石市立江井島中学校 河田 武志

1 赴任地の概要

ロッテルダムは、オランダ第二の都市、人口およそ 63 万人、オランダ中西部に位置し、ヨーロッパの玄関口である貿易港ユーロポートがある。気候は海洋性で、空気が乾燥し、夏はカラッとしており、冬の雪は少ない。今年は一8℃まで下がり運河が凍ったが、比較的過ごしやすい気候であった。大きな特徴として、海拔 0m の地帯では海水を風車でかき出し、干拓地を広げている。山はほとんどなく、様々な表情に変化する大空が広がっている。

歴史のある建造物が残る首都アムステルダムとは違い、ロッテルダムは第二次世界大戦中、ドイツ軍の空襲を受け、町は壊滅状態となった。その後、近代的な建造物が建設され、見事に復活を遂げている。有名な建物としては、ユニークな形をしたキューブハウス（ユースホステル・ミュージアム）や斬新なデザインのマルクトハル（商業施設）などがある。その前の広場では、毎週火曜日・土曜日にマーケットが開かれ、多くの人々でにぎわう。郊外へ出ると、牧草地が広がり、大変のどかな印象をもつ。

主言語はオランダ語である。移民の多い国であるが、移民のオランダ語習得率が非常に高いことは大変興味深い。また、第二言語としてドイツ語・フランス語・英語などを学校で履修する。

日本から来た私達にとっては、オランダ語を身につけるのは大変難しく、日常生活では英語を使用した。スーパー、お店、街中では英語によるコミュニケーションが問題なく行えた。オランダは小さな国であるため、近隣諸国と拮抗してきた。そのため、他言語を学ぶことに抵抗がなく、他国から学び、他国に人材を送り出すことに糸目がない。このように肩に力が入ったプライドがなく、柔軟に近隣諸国と渡り合っていることがオランダの特徴である。

2 赴任校の概要

本校は、ロッテルダム校外の閑静な住宅街の中にあり、設立母体は在日本商工会議所（JCC）である。校舎は、オランダ王国・ロッテルダム市・インターナショナルスクール（AISR）・日本人学校の出資により設立された国際教育センター（IEC）の中にあり、施設をインターナショナルスクールと共有している。平成 29 年度（2017 年度）は、小学部 32 名・中学部 8 名・全校生 40 名が在籍し、小規模校としての特徴をもつ。派遣教員 8 名、現地採用 5 名、全教職員 13 名。小学 1、2 年及び中学 1～3 年は単独学級、小学 3・4 年及び小学 5・6 年は複式学級を採用。小規模校の長所として、児童・生徒一人ひとりに応じた指導が展開できる。交流学习および様々な行事を学校全体で作上げることができ、子どもにとって、大変やりがいや達成感を味わうことができる。ただ、各授業における児童・生徒同士の意見交換の充実や多様性が、大きな課題であり、工夫が求められる。

3 特色ある教育実践

本校の教育目標である「思いやりのある人」「よく考え学びあえる人」「世界に目を開く人」の具現化のために、少人数によるきめ細やかな授業を展開しながら確かな学力の定着を目指し、「コミュニケーション能力の向上（日本語・英語教育の充実）」、「現地理解教育の充実（現地校交流、校外学習）」、「キャリア教育の充実（職場体験・進路指導）」に力を入れ、豊かな国際性を身に付け、21 世紀をたくましく生き抜く児童生徒の育成に取り組んでいる。

○「コミュニケーション能力の向上（日本語・英語教育の充実）」

朝の読書タイムは、全児童生徒が静かに集中して読書。図書室の蔵書数は約 8,500 冊で、パソコンによる図書貸し出しの集中管理を行っている。◆スピーチ発表、話し合い活動、グループ活動を授業に取り入れ、表現力の向上に努めている。◆学校行事や児童会・生徒会活動での進行、発表、話し合い活動を実施し、表現力の向上に努めている。◆日本の伝統的な行事（七夕、節分、餅つき、和太鼓演奏等）を行い、日本の文化について指導をしている。◆経験豊富で指導力のあるオランダ人講師が英語（英会話）を担当している。「小学部」1～4 年週 2 時間の英会話（1 コマ 20 分×週 4 回の指導）5・6 年週 3 時間の英会話「中学部」週 4 時間の英語（週 1 時間オランダ人講師 T T で参加）週 2 時間の英会話（オランダ人講師による 1 コマ 20 分×週 4 回の指導）◆体育の水泳を現地スタッフ講師による英語の授業を行っている。◆インターナショナルスクール（AISR）と英語による交流授業を実施している。

○「現地理解教育の充実（現地校交流、校外学習）」

交流活動を通して、人とのつながりを大切にすることを育成するとともに、これまで学習してきたコミュニケーション能力（Warm Heart[Smile, Compliment, Welcome & Thanks, Show Interest]）を発揮する実践の場としている。◆オランダ語に慣れ親しむために、校外学習（ハーリング、オリボーレン買い物レッスン）や現地校と交流することから、オランダ人講師による「オランダ語強調週間」を設定し、オランダ語会話の習得に努めている。

○「キャリア教育の充実（職場体験・進路指導）」

職場見学・職場体験、外部講師招聘を通して、将来の夢や職業について考える機会を設け、日蘭の架け橋、国際社会で活躍できる人材育成に努めている。

4 成果（派遣教員として得たもの）

ユニセフの調査によると、オランダの子どもの幸福度は先進国 29 カ国の中で最も高い。またオランダの子どもの幸福度は数値が客観的に高いだけでなく、子ども自身も 95% が幸福だと感じている。日本の 1.5 倍あるといわれる、オランダ国民の学力や労働生産性の秘訣を研究テーマとして、3 年間考察に努めた。

幸福度の高い理由として第一に挙げられるのは、「社会制度の充実」が挙げられる。「教育の自由化」が進んでいるため、移民を含めて、質の高い教育を受けることができる。そして、「医療保障制度」や「雇用」が充実しているため、不安を抱えずに、日常生活を送れる等、「理想的な社会制度」である。第二に、個人の「心の在り方」である。幼少期から子どもを社会全体が大切に育てており、個々のアイデンティティを大切にし、一人ひとりの大人が自尊感情を高めている。そうした個の捉え方で子どもの成長が大きく変わる。第三に、「多様性と創造性」である。先進国の中でも、小国としての立場を最大限に生かし、外へ出ること外部から取り入れることに抵抗がなく、多様性が受け入れられている。そして、創造力を大切にし、新たに画期的なことを生み出すことができる無限の可能性を秘めている。

上記の三点において、幸せと感じる度合いや幸福度の質が日本に比べて高いと考える。この気づきをもとに、日本の良いところはこれからも大切に、変えていくべきところは、我々大人が見極め、改革を図る必要がある。いずれにせよ、オランダ人や日本人にとって、生きる上での最高の目標は、「幸せに生きる」ことである。これからの教育現場では、一人ひとりの存在意義を子どもにもたせ、自立型人間の育成を目指したい。

台湾 台中日本人学校に赴任して
～生きる力と国際性を身につけた 心身ともに健全なこどもの育成を目指して～

神河町立神河中学校 三輪信之

1 赴任地の概観

台湾では建国以来、国民党による一党独裁政治が続いてきた。1998年に李登輝が総統に就任して以来、急速に民主化が進み、2000年には民進党・陳水扁が総統に就任し、台湾初の政権交代が実現した。2008年の総統選挙では、国民党の馬英九が勝利し、国民党が約10年ぶりに政権を取り戻した。2016年には民進党の蔡英文が初の女性総統となり、現在に至っている。

一般的には「台湾」の名で知られているが、正式な国号は「中華民国」である。国内では、西暦よりも中華民国の開国記念日（辛亥革命の翌年1912年1月1日）が制定された年を元年とした「民国」という年号が広く使われている。（西暦から1911年引いた数が民国年であり、2018年は民国107年になる。）人口はおよそ2,355万人。人口の大多数を漢民族が占め、そのほか原住民（16種族）が住んでいる。（原住民という言い方は、日本では差別的な表現とされるが、台湾ではその認識はなく、一般に原住民と言う。）また世界有数の外貨保有高を誇る国でもある。



台中市は、北回帰線の北方に位置し、台北から南へ約170kmのところにある台湾第3の都市である。2010年12月に台中縣と台中市が合併し、市の人口は約278万人、台湾中部では最大の都市としての役割を担い、近郊に多くの工業区を有する発展著しい都市である。

気候は亜熱帯性気候に属し、一年のうち3月から11月が夏、12月から2月が冬というように区分される。年によって多少の寒暖差はあるが、3月頃から暑くなり始め、4月には気温が25℃以上上昇する。5月から6月にかけては梅雨期となりジメジメした日々が続く。7月から8月にかけて一年で最も暑い時期を迎え、気温は日中35℃前後にまで達し、夜は熱帯夜が続く。また、7月から9月にかけては台風シーズンで、台湾は台風の通り道に位置するため、台風が来るたびに洪水、土砂崩れなどの災害に見舞われ、多くの被害が出ることもある。9月後半頃から10・11月にかけて次第に気温が下がり始める。気温が下がるといっても20℃から26℃程度はある。しかし、暑い時期との気温差が大きいため、非常に肌寒く感じられる。12月から2月頃の気温は最低でも10℃前後で雨はほとんど降らず、空気も乾燥する。

台中市が位置する中西部から南部にかけて豊かな平野が広がり、農業の機械化も著しく普及し米、茶、サトウキビなどの農作物は年々生産高が増加している。年平均気温は約22℃と暖かく、パイナップルやスイカなどは、一年中味わうことができる。その他、各地でマンゴー、葡萄、梨などさまざまな果物が栽培されている。

2 赴任校の概要

台中日本人学校は、市街地から北西へ12kmほど離れた丘陵地に位置する。中部科学工業園区に隣接し、周囲を田畑に囲まれた静かで穏やかな土地で、校舎屋上からは台中市を一望できる。近くに台中空港（空軍基地併設）があり、軍用機が学校の上を横切る光景は頻繁に見られるが、市内の喧騒からも離れた教育を行う上で絶好の環境といえる。児童、生徒数は、小中学部合わせて130名（平成29年度）。各学年単学級の小規模な学校であるが、教職員を含めて家族的な雰囲気と和気あいあいとした学校である。

職員は、文科省派遣教員13名、現地採用教員5名で構成されている。現地採用教員は、5名中4名が台湾人の教員であり、大変心強い存在である。

児童生徒は、約半数が日本人家庭で、残りの半数が国際結婚家庭である。これは各地の日本人学校の中でも稀なケースであると考えられる。卒業後の進路は、日本の高校、台湾の現地校、市内にあるインターナショナルスクール（アメリカンスクール）など多様である。



3 特色ある教育実践

(1) 教科・学習指導

- ① 小学部1年生から4年生までは、学級担任による教科指導を基本としながら、必要に応じて専科による教科指導を行う。小学部5年生以上は、可能な限り教科担任制とする。
(平成29年度は1～3年生は音楽と図工に専科が入った。以下、4年生は理科・音楽・図工、5年生は国語・数学・社会・英会話・音楽・図工・家庭・体育、6年生は社会・理科・英会話・音楽・図工・家庭)
- ② 毎学期はじめ、第2週に漢字コンテスト、第3週に計算コンテストを実施する。中学部に関しては、定期考査前に英単語コンテストも実施する。90点以上を合格とし、基礎・基本の定着を図り、合格点が取れるまで昼休みや放課後に指導する。
- ③ 小学部1年生から英会話を実施し、英語に親しませる。小学部5、6年生の外国語活動は、中学部の英語科教員、英会話はネイティブの講師により実施し、日本での教科としての外国語にも適応できるように指導を充実させる。中学部は英語の授業を週4時間に加えてネイティブの講師による習熟度別英会話授業を実施し、習熟度に応じた英語教育を行う。
- ④ 中国語並びに日本語の力をつけるため、子どもの能力に応じた適切な指導と教材を開発する。
ア) 小学部1～4年生は中国語の目標を低・中・高の2学年ごとに明確にする。
イ) 小学部5・6年生は、グレード毎に初級・上級によるクラス編成を行う。
ウ) 中学部は現地の高校へ進学する生徒へ対応するために進学中国語を設定し、3クラス編成とする。
- ⑤ 幅広い人材活用を推進する視点から、英語外部講師やスペシャリスト、職業体験や体験学習が要求される分野などで積極的に導入を図る。
(平成29年度は、英会話指導、中国語指導、水泳指導、剣道指導、和太鼓指導など)

(2) 学校行事

- ① 日本の伝統行事…小学部は、日本の伝統行事に少しでも触れさせるため、「こいのぼり集会」・「七夕集会」・「節分集会」を実施している。また、PTA主催で「餅つき大会」や日本人会主催の「夏祭り」などを参加型で体験している。
- ② 運動会…クラスを紅白2組に分け、小中合わせた縦割りで実施する。中学生が小学部低学年の応援をしている姿は微笑ましく、小学部低学年も中学生に関わってもらうことを喜んでいる。
- ③ 学習発表会…小学部奇数学年が音楽発表、偶数学年が劇や調べ学習を発表する。音楽発表は、単に歌唱や合奏するだけでなく、テーマに沿った選曲をし、曲紹介や調べたことなども発表する。中学部は全体で合唱2曲、縦割り3グループで太鼓演奏3曲を発表する。
- ④ 校外学習…小学部は学年毎に、「地域を知る」ことをテーマとし、市内にある公園や市政府、デパートやスーパーマーケット、下水処理場や自動車工場などの見学に行く。また、小学部全学年・中学部全学年で、体験活動や班別学習を取り入れた校外学習も実施する。
- ⑤ 現地校との交流…年に一度、現地の小学校、中学校との交流会を行う。隔年でホスト校を担い、それぞれの国のスポーツや伝統文化を通して交流を図る。また、小学部6年生は、修学旅行で原住民が多く通う小学校を訪ね、交流を毎回実施している。中学部2年生は現地校へ1週間の短期留学を行っている。また、平成29年度より現地校生徒の受け入れを開始した。中国語の向上と、コミュニケーションの手段として英語の必要性を感じることができる期間である。



4 成果

日本人学校の中では中規模校に値する台中日本人学校ではあるが、小中一貫教育の在り方を何よりも学ぶことができた。幸運なことに、小学1年生から中学3年生まで、全ての学年の音楽を担当したことが大きく、今後の音楽教育活動に生かせる指導力を得た気がする。



また、日本国内において、国際化が加速して進んでいる中、英語教育が今後いかに重要であるか、現地校の取り組みからも感じた。日本の子どもたちに、幅広い視野を持たせる機会を持たせていきたい。

ケニア国キリニャガ県ワムム更生学校での活動

兵庫県立香住高等学校 安藤洋之

1 赴任地の概観

(1) ケニアについて

アフリカ大陸の東に位置している。ケニアは赤道直下にもかかわらず、標高が高いため朝晩は涼しく、日中は30度近くまで気温が上昇する。非常に乾燥しているので日なたにいと汗ばむが、日陰に入ると涼しく、一年を通して快適に過ごせる。ケニアには四季がなく、雨期と乾期に分かれている。雨期は1年に2度あり、3～5月が大雨季、11～12月中旬が小雨期である。乾期に雨が降ることはほぼ無く、雨期に十分な雨が降らない年は川の水が干上がり、水不足が深刻な問題となる。

国土は日本の約1.5倍、人口は日本の約3分の1である。国民は40以上の部族から形成されており、大都市（首都ナイロビやナクル、エルドレットなどの中都市）を除いて、部族ごとに固まって暮らしている。現在では部族間の争いは見られないが、2007年の大統領選挙の際には政権与党（キクユ族：ケニア人口の約20%・カレンジン族ケニア人口の約15%）と野党（ルイヤ族：ケニア人口の約15%・ルオ族：ケニア人口の約10%）の間で大規模の暴動が発生し、部族同士の殺し合いに発展した過去がある。派遣期間中の2017年にも大統領選挙が実施された。現職大統領が一度は当選したが、対立候補の野党側は不正があったとして最高裁に異議を申し立てた。最高裁は異議を認め、選挙結果が無効であると判決を下し、異例の大統領選挙の再選挙を命じた。大規模の暴動まで発展はしなかったが、その期間在ケニア邦人は外出を控えるなど十分な注意が必要であった。

ケニアでは公用語の英語と母国語のスワヒリ語、そしてそれぞれの部族語が話されている。小学校の高学年からすべての授業が英語で実施される。また、英語を習得させるために学校での部族語の使用を禁止している学校もある。2017年までは8-4-4の教育制度であったが、2018年より6-3-3-4の教育制度に変更される。

(2) キリニャガ県について

ケニアの首都ナイロビより北に車で2時間走ったところがキリニャガ県である。この土地はキクユランドと言われており、住民の9割以上がキクユ族で構成されている。ケニア山（標高5,199m※アフリカ大陸第2位）が近くにあるので比較的水に恵まれており、ケニア一の稲作地帯であるMwea（ムウェア）という地域で有名である。

2 配属先の概要

私の配属先はキリニャガ県にあるワムム更生学校である。罪を犯してしまった10歳～17歳の子供が生活をする全寮制の男子更生施設で、常時100名ほどの子供が収容されている。子供たちはこの施設で最大3年間過ごすことになっており、その間家に戻ることはもちろん、許可なく施設の敷地から外に出ることは許されていない。社会復帰及び再犯防止を目的としたカウンセリングやPrimary schoolに準ずる初等教育、職業訓練（木工、石造建築、整備士、農業、芸術）、レクリエーション等の更生プログラムが実施されている。スタッフは普通授業を行うAcademic部門に6名、職業訓練を行うVocational部門に5名、施設責任者を含める事務職員が5名、セキュリティオフィサーが3名の計19名で施設を運営している。

3 特色ある教育実践

(1) 配属先からの要請内容

体育の授業担当・放課後の時間を利用したスポーツ指導・生徒の個別、グループカウンセリング・休暇を利用して日本の音楽の指導（Kenya National Music Festivalへの出場）・施設の運営改善など、多岐にわたる要請であった。

(2) 赴任当初の状況

ワムム更生学校はケニアに全部で10ある更生学校の中でも特にスタッフの管理が行き届いている施設と言われており、毎日の更生プログラムが各部門の責任者の下で比較的安定して行われていた。しか

し、施設の予算不足から十分な内容の教育活動が実施できておらず、スポーツ、音楽、美術などの情操教育に対する考え方も、日本のそれとは大きく異なっていた。ケニア人教師にとって体育の時間は生徒の休憩・遊びの時間であり、音楽や芸術は授業ではなく娯楽と捉えている教員がほとんどである。また、体罰が常習的に行われており（直径1センチほどの木の棒で複数回臀部をかなり強く叩く行為）、教員と生徒の間に信頼関係はなく、支配的な関係が見受けられた。

(3) 活動内容

- ア 【体育の授業担当】 体育は休憩や遊びではなく、授業であり時間管理やチームワーク、協調性を学ぶ時間であるという共通の理解をケニア人教師と持ち、全ての学年の体育を担当した。
- イ 【放課後の時間を利用したスポーツ指導】 放課後の時間を利用し、スポーツ（サッカー・バレーボール・ハンドボール・ネットボール、またはボールを使わない遊び）を実施。良好な人間関係を形成するために生徒だけではなく、なるべく教員も一緒にするように声掛けを行い、参加を促した。
- ウ 【アートマイルプロジェクトへの参加】 職業訓練の中の芸術クラスに参加させてもらい、アートマイルプロジェクトへ参加した。岐阜県立共栄小学校の6年生とスカイプ会議を重ね、一枚の壁画を完成させた。
- エ 【更生プログラムの改善・充実】 毎週水曜日に実施されている Rehabilitation の時間の教材の作成を行った。薬物、性教育、キャリア教育、エイズ、チームビルディングなどのトピックに関して教材を作成し、ケニア人教師と実施した。
- オ 【掲示物やスクールパンフレットの作成】 外部への情報発信と保護者に更生学校の教育活動の理解と協力を得るために、ワムム更生学校で日々どのような活動をしているかをパンフレットにし配布した。また生徒の活躍を学校新聞という形でケニア人教師と一緒に作成し、掲示した。
- カ 【コーチングのワークショップを実施】 ケニアでは体罰は法律で禁止されているが、慣習的に体罰がほぼ全ての学校で行われている。叱り方・褒め方という観点でワークショップを開催し、体罰ではなく対話を通じた指導方法を考える機会を作り、全ての教員と話し合った。

4 成果

1年9ヶ月、周りに日本人のいないアフリカの田舎の村で生活した。言葉も風習も価値観も全てが異なる文化に溶け込む過程で、ケニアとケニア人を嫌いになった時期もあったが、今振り返ると自分の人生の中でも貴重な経験であり、自分の知見と視界を大きく広げてくれた時間であった。ケニアに派遣されるまでは「遠いアフリカで暮らす私達日本人とは大きく異なる黒人社会」であった自分の中の概念がガラリと変わった。肌の色や風習は異なるが、隣人や客人を大切に、助け合う精神に満ちたケニア人を非常に身近に感じるようになった。住む国は違うが同じ人間であるということのを頭ではなく、自分の心で実感できた。そう実感できたからこそ、貧しさから十分な教育機会が与えられず貧困から抜け出せない人々や、医療福祉制度が整っていないことが理由で失われてしまう命が他人事ではなくなったように感じる。

スワヒリ語を学び習得すること、我が身をもって異文化理解を実践したことが高校の英語科教員として非常に有意義な経験であったと感じている。自分の英語の授業を見直す良い機会となった。ケニアでできた繋がりを活かした異文化交流を現在勤務している高校でも実践していきたい。

異国で何もない所から活動内容を考えて、関連機関に協力を得たり、他のボランティアと協力するなど、プレゼン力や交渉力、協調性や行動力など多くの力を鍛えることができた。これは今後の教員人生において自分の働き方を変える大きな契機となったと考えている。

自分なりにこのケニアでの経験を消化し、自分の生徒を含めたこれから出会う人々に還元したいと考えている。楽しかったことも、辛かったことも、ケニアで感じた怒りも、悲しみも、喜びも全てをひっくり返して、青年海外協力隊に挑戦して良かったと心から思っている。

1. サウジアラビアの概要

サウジアラビアは、アラーを神とするイスラム教の始祖ムハンマドが生まれ、メッカ・メディナというイスラム 2 大聖地をかかえるイスラム教発祥地であるため、イスラム聖典である“コーラン”の戒律が厳守されている。アルコール、男女の混同、集会、賭け事などが禁止、また豚は不潔・不浄であると考えられているため国内で豚肉を入手することは不可能である。これらの禁止事項については、我々外国人にも同様のルールが課され、タブーを犯すと罰せられる。



女性への制限も多く、外出する際には頭から足の先まで黒いマント（アバヤ）で身を隠さなければならない。また、世界で唯一、女性が自動車の運転をすることが認められていない国であり、女性の人権問題についてしばしば国際的な問題として取り扱われた。しかし、ムハンマド・ビン・サルマン皇太子が中心となって作成した石油依存型経済からの脱却を目指した“サウジビジョン 2030”という改革の中で、女性の自動車運転、スタジアムでのスポーツ観戦が認められるなど大きな変化が生じている最中である。経済が石油に依存している実情での原油価格低迷は国家に大きな打撃を与えており、脱石油経済の取組が急務とされている。ガソリンの値上げや消費税の導入など、今後の政府の歳入を増やすための方法が模索されている最中である。サウジアラビアは今、大きな変革の時期を迎えている。

【正式国名】	サウジアラビア王国	(Kingdom of Saudi Arabia)
【首都】	リヤド	【面積】 約 215 万 km ² (日本の約 5.7 倍)
【人口】	2920 万人 (うち外国人 936 万人)	【言語】 アラビア語 (公用語) 英語
【宗教】	イスラム教	【通貨】 SR (サウジリアル) 1 SR ≒ 3.75USD
【元首】	2015 年 1 月 23 日に 6 代目国王 (アブドラ国王) が崩御し、現在は 7 代目国王 (サルマン国王) が即位している。2 代目～7 代目の国王は全て初代国王 (イブン・サワード) の子どもであり、現皇太子が即位すれば実子継承が途切れることとなる。	

2. リヤド日本人学校の概要

1978 年の日本人会総会でリヤド日本人の設立決議がなされた 7 年後の 1985 年 4 月、企業の宿舎を仮校舎としてリヤド日本人学校が開校した。その年の 9 月 20 日、校舎の落成祝賀式が行われ、この日が開校記念日として定められている。1987 年 3 月には第 1 回卒業式が行われ、翌 1987 (昭和 62) 年度には、リヤド日本人学校最大の 37 名の児童生徒が在籍した状態で新年度をスタートさせた。



リヤド日本人学校史上、最大の危機は 1990 年に起こった湾岸戦争 (イラクのクウェート侵略に端を発し、翌年 1 月から約 40 日間イラク軍と米軍中心の多国籍軍との間で起こった戦争。イラクの敗北で停戦。) であったと言える。1 学期には 26 名の児童生徒が在籍し、7 名の文科省派遣教員が働いていたものの、湾岸戦争が始まった時点で多くの児童生徒が帰国していった。8 月 9 日、大使館から邦人の避難勧奨が出され、教員は文部省 (当時) の指示により校長を除く 6 名が帰国した。児童生徒も、大半は帰国していたものの、リヤドに留まる大使館関係者の同伴家族もおり、残った校長が一人で授業を担当した。しかし徐々にその数も減り、2 学期途中には在籍児童が 1 名になるときもあった。10 月末、一時帰国していた 6 名の教員のうち、3 名がリヤドに再度赴任することになった。教員の赴任に伴い、その同伴家族児童もおり、学校は活気を取り戻していった。湾岸戦争が終了すると、徐々に在籍児童生徒数も増え、学校は日常を取り戻していった。

2015 年 9 月に、リヤド日本人学校は開校 30 周年を迎えた。しかし、年々在籍児童数は減少しており、2018 年 3 月現在には、小学生 8 名のみの在籍にとどまっている。全世界にある 89 校の日本人学校のうち、在籍児童生徒数が一桁の学校は数校しかなく、リヤド日本人学校は世界最小の日本人学校に分類で

きる。校舎の老朽化対策と在籍児童生徒数増加を見込み、2018年4月から在留邦人が通学しやすい場所へ校舎を移転した。我々2017年度末で帰国する教員は、旧校舎の使用とともに任期を終えることとなった。

3. 教育実践

グローバル人材の育成が国家戦略として求められるようになって久しいが、私自身は“英語をペラペラ話せても、中身がペラペラ”であるならば、グローバルな人材であるとは言えないと考えている。海外に暮らす特色を大切にしながらも、考え・行動の核となる日本に関する知識を身につけさせることが大切である。日本への知識・理解を深めるため、月ごとに季節にちなんだ掲示物を作成し、日本の様子を伝え、考える機会を設けた。日本を感じる機会が少ない外国で生活しているからこそ、日本について学ぶ機会を確保する必要だからである。早期の英語教育の充実を希望する保護者からすると日本人学校は物足りず、子をインターナショナルスクールに通わせる家庭もある一方、“日本人学校へのニーズは5S（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）だ。”と断言する保護者もいる。自分の故郷について知ることや5S定着に力を入れるというのは、学習指導と並行して日本のどの学校でも行われていることであり、学校教育の必然性を感じることとなった。



少人数であるため、話し合いの活動などにおいては、いつも同じメンバーとの組み合わせになったり、学年によっては教師と児童が一对一で授業を行ったり、発展的なものにならないことがあった。一方で、総合的な学習の時間などにおいては、縦割り班で同じ課題に取り組み、年長者が年長者、在留経験の長い者が短い者をサポートするなど少人数の良さが前面に出てくる場面もあった。3年間を「サウジアラビアの水について/サウジアラビアの文化について/サウジアラビアのエネルギー事情について」という3つの柱で計画を立て、児童生徒は少人数の特性を生かし主体的に学習に取り組んだ。年度末に実施する学習発表会では、児童生徒自作のパワーポイントを使用しながら、プレゼンや劇、歌、書面発表などさまざまな形式で学習内容を発表し、サウジアラビアへの理解を深める機会となった。

昨年度は“サウジアラビアのエネルギー事情”について学習を深めたが、その中で“中東の石油”について取り扱った。全校児童生徒・職員で参加をする“宿泊体験学習”には、総合のテーマに合わせて実施されるが、中東で最初の油田が見つけられたとされるバーレーンへも足を運んだ。制限の多いサウジアラビアに比べ、バーレーンは戒律がゆるく観光地として栄えているところもあるため、皆で開放的な雰囲気を味わった。夕食で食べたとんかつ定食は思い出に残る味となった。

4. まとめ

小学校の先生たちは、児童に発言をさせ、道具を使って活動をさせ、何度も繰り返し取り組ませ、新聞などにまとめさせていた。時間が余れば問題を解けばいい、と考えがちな自分とは大きく異なり、小学校教員の授業構成力の高さを感じた。学年や校種が上がると量も多く、内容も難しくなるため“教える”ことに重点を置きがちだが“主体的で対話的な学び”を実践するために見習うところがたくさんあると痛感した。逆に中学校の教員は、生徒指導や進路指導の経験から情報を共有したり、個別のニーズを理解しながら個々に合った指導をしたりする意識が小学校教員よりも高いようである。それぞれの長所を理解しあい、協力することができた。



“帰国時に自分はどれだけ成長しているだろう”と期待をしていたが、いざその時期を迎えると、自身の成長をあまり感じるができなかった。しかし、日本のこと、仕事のこと、そして自分自身を見つめる時間を持つことができたので、日本、教員という仕事で以前よりもっと好きになった。自分自身の成長のためには、帰国後の取組こそを大切にしなければいけないと考えている。謙虚さを忘れず、0から再スタートという気持ちで日々の業務に取り組んでいる。

1 赴任地の概要

アラブ首長国連邦は1971年にイギリスの保護領から独立した国である。アブダビ、ドバイ、シャルジャ、フジャイラ、アジュマン、ラス＝アル＝ハイマ、ウム＝アル＝カイワインの7つの首長国からなる連邦で、アブダビとドバイが産出する石油の利潤で、急速に都市化・近代化の進んだ国である。日本大使館は首都アブダビにあり、ドバイには総領事館がある。「商都」ドバイの人口は、約240万人(2015年)で、インド・パキスタン人が一番多く、その他湾岸諸国、アジア、アフリカ等からの出稼ぎ労働者であふれている。UAEの



純粋な国籍を有する人 (Emiratis) は、2割程度である。現在、日本とドバイとの貿易の進展や経済成長はめざましいものがあり、ドバイには、中東・アフリカ地区で最も多い2,912人(2016年10月1日現在)の日本人が住んでいる。(UAEには3,846名の日本人が住んでおり、日系企業は322社になる。) UAEは建国46年ほどの歴史しかないが、ヨーロッパをしのぐ程のビル群やホテル群に高速道路を有する近代都市を完成させようとしている。12月2日が建国記念日(UAE ナショナルデー)になっている。2004年11月、建国の父ザイード大統領が逝去され、現在はアブダビのカリーファ首長が大統領であり、ドバイのムハンマド首長が総理大臣兼副大統領である。連邦として一国の形態をとってはいるが、内政の面になるとまだまだドバイはドバイ、アブダビはアブダビで「国」は異なるという意識が強く残っている。UAEはGDPの約31%が石油と天然ガスで占められ、日本がその最大の輸出先であるなど、UAEと日本との関係は良く、特に経済面では密接である。このほかにも人的交流、文化交流なども含めた様々な面において、今後とも更に関係が強化されていくことが望まれている。夏場は最高気温が50℃に迫り、冬場でも30℃近い気候のドバイではあるが、アラブの顔、アジアの顔、そしてヨーロッパの顔を持ったこの商都ドバイでは、いろいろなことを学び感じることができる。町中のいたる所にある建設中のビルを見ると、気候的な暑さだけでなく人々の熱気も感じることができる。

2 赴任校の概要

ドバイ日本人学校は、1980年4月、小学生32名、中学生2名、派遣教員3名、現地採用教員2名でスタートし、平成30年度で38年目を迎えている。開校当初は一般民家を借用していたため、教室・校庭とも、とても満足な施設とは言えず大変不自由な思いをしていた。しかし、長年の念願であった新校舎が、学校運営理事会・日本人会、派遣教員のみなみなならぬ努力の結果、昭和62年(1987年)12月に完成し、児童生徒たちはその校舎の中でのびのびと学習している。旧校舎は市街地にあったため、十分な広さを確保できなかったが、現校舎は、文教、住宅街の約4,400坪の敷地の中に建てられている。普通教室の他、特別教室、体育館があり、体育館を含む全室が冷房付きなので、真夏の酷暑もあまり気にせず気持ちよく学習できている。200m以上のトラックがたっぷりととれるグラウンドは114名(平成29年9月1日現在)の児童生徒には十分な広さである。児童生徒の増加(最大237名)に伴い、



平成19年度の夏、校舎が増築されたが、平成21年度より、児童生徒数は緩やかに減少傾向になり、現在はほぼ横ばいの状況である。児童生徒はアパート(レジデンス)や一戸建て(ヴィラ)に住んでおり、大多数の児童生徒は、スクールバスにて通学している。また、ドバイに派遣されている日本企業の子供がほとんどのため、編入学や退学が頻繁である。1999年2月から、本校では週5日制が実施されている。宗教上の関係で、木、金曜日が週休日となっていたが、2006年9月から金、土曜日に変更された。

3 特色ある教育実践

(1) 「思考力・表現力を高めるための授業研究」

本校の研究テーマの中にある「思考力・表現力」に重点を置き、ICTの活用や協調学習の効果的な活用により、基礎学力の高い本校の生徒に対して、更なる学びの深まりと、やや苦手とする英語による表現力を高めることをねらいとして取り組んだ。

平成27年度はICTの活用を、平成28年度と29年度については協調学習についての研究授業を行った。(平成28年度は「学び合い」平成29年度は「少人数グループの活用とその効果的な課題設定」) ICTについては、プレゼンテーションの有効な教具として活用したり、やや高度な内容の課題を解決するためにインターネットを活用したりして、その有用性を再確認した。協調学習については、ペア学習・グループ学習・一斉指導の組み合わせで、課題に応じた有効な授業形態について研修できた。特に、少人数グループで取り組む課題について、ただ難易度を高めるだけではなく、グループで取り組むべき課題を設定することの方がより重要であることを学んだ。



(2) 「実体験の基づく国際理解教育」

英語科教員として本校の国際理解教育を担当し、様々な取り組みを行った。児童・生徒の現地校生との交流や、職員の研修などを企画し実施した。とくに、現地校との交流では、現地の文化を学ぶのみならず、日本の文化を伝えることが交流を更に深化させることにつながると考えた。

年3回ないし4回の現地校との交流を通して、本校の児童・生徒が主体的に異文化理解に取り組むために、事前事後指導の強化を、また、日本の文化を現地校の生徒に伝えるために、日本の伝統芸能を紹介する場面の設定を行い、本校の児童・生徒の関心・意欲を高めることができた。



4 成果

まずは3年間、ドバイ日本人学校での研修出張の機会を与えていただいたことに、心からの感謝を申し上げたい。英語教師として12年目に海外で教育活動の機会を与えていただいたことは大きな経験であり、今後の日本での教育活動に生かしていきたいと強く感じている。

ドバイでの3年間、まずは海外に住む子どもたちのために自分にできることを精一杯に実践し、国際性豊かな子どもを育成する、ということを第1の目標に日々の教育活動に取り組んだ。素直な子どもたちは外国語の学習のみならず、海外の文化にも高い関心をもっており、現地校との交流や校外学習、現地理解講座などに積極的に取り組むことができていた。今後、彼らが更に国際化の進む世界の中で日本のリーダーとして活躍することを強く期待している。

また、日本と同様もしくはそれ以上に、家庭と連携した生徒理解の必要性を感じた3年間でもあった。生徒本人の意思と関係なく、突然に異文化の地で生活することになった生徒がほとんどであり、その中で不安を感じる生徒も少なからずいた。そんな生徒たちに寄り添い、当地での生活について相談に乗ったり、時には生徒の帰国を含めた様々な選択肢をもちながら何度も保護者とも懇談をしたりしたこともあった。子どもたちに「いつでも気軽に相談に来ていいよ」という雰囲気を出しながら笑顔で接し、何か不安を感じたときにはすぐに子どもから、また教師から声をかけることができるような距離感をもつことの大切さも、様々なケースから学ぶことができた。

今後も子どもたちの笑顔のために、この3年間の経験を生かし教員人生を歩んでいきたい。

1 赴任地の概観

フランスは、ヨーロッパ大陸の西岸部にあり、ヨーロッパの中では広い国で、日本の約1.5倍ある。国土は平地が多く、土地が肥えているうえ、おだやかな気候にめぐまれ、西ヨーロッパで最も農業の盛んな国である。パリ市の中心部には、世界を代表する建造物がたくさんあり、美術館も多く、1年を通して世界中からたくさんの観光客が訪れる。パリ日本人学校は、モンティニーというパリ近郊の街にある。1970年に周りの6つの市とともに、サンカンタン・アン・イブリーヌという新しい都市に指定された。サンカンタンはイブリーヌ県にあり、イブリーヌ県はイル・ド・フランスの西側に位置し、三角形の形をした県である。県内にはベルサイユ、サンジェルマン・アン・レイ、ランブイエなどの古い町が残っている。その中で、モンティニー市は計画的な町作づくりがなされ、たくさんの企業やスーパーマーケット(シュペルマルシェ)が町に入ってきた。モンティニー市の人口は現在約36000人。鉄道(RER)の駅や、オートルート(高速道路)のインターチェンジなどがあり、サンカンタンの町の入り口となっている。学校の西側にはサンカンタン池や、ヨーロッパでも有数の規模を誇る自転車競技場ベロドロームがある。この地域はフランス国内でも比較的治安の良い地域と言える。

2 赴任校の概要

パリ日本人学校は、パリから20kmほど南西に位置するモンティニー・ル・ブルトヌー市にある。パリ日本人学校は1973年10月1日、大使館や、商工会議所、日本人会などの人たちの協力を得てパリに開校。開校当時の児童・生徒数は110名。校舎はトロカデロ広場の近くにある元日本大使館だった古い建物を使っていた。開校して5年ほどが経つと児童・生徒の数は2倍に増え、教室が狭くなってきた。そこで、中学部は、1984年にパリ市外のシュレーヌにアパートを借り、授業をするようになった。それでも人数は増え続け、広い敷地に新しい校舎を造ろうという声が大きくなってきた。その後、現在のサンカンタンに新しい校舎を造ることがきまり、1984年4月にその工事が始まり、1990年4月からは完成した現在の校舎で小・中学部が一緒に学習できるようになった。



平成29年度は、小学部150名程度、中学部40名程度の計190名程度の児童・生徒数でスタートした。転入が多い学校で人数の増減はあるが、200名前後の児童・生徒たちが学習している。

学年編制は、小学部が6学級、中学部が3学級の9学級である。学級編制基準は、国内同様小学部1年生は35名以下を1学級、小学部2年生以上中学部は40名以下を1学級としている。

教育目標は「学ぶ喜びと誇りをもち、自らを鍛え、共に伸びようとする児童・生徒の育成」とし、校訓は「明るく・仲良く・たくましく ～心のふるさととなる“あなた”を大切に作る学校～」である。また、目ざす児童・生徒像として、【1. 明るく生きる子(夢と希望)】【2. 仲良く生きる子(思いやり)】【3. たくましく生きる子(心身の健康)】を掲げ、このような児童・生徒を育成するために【子どもたちの国語教育の充実 ～国語力の育成～】や【グローバル人材の育成】を研修テーマに設定し、研修を進めていった。

3 特色ある教育実践

(1) 教育課程

パリ日本人学校では小学部45分、中学部50分を一単位時間としている。一単位時間の開始・終了をほぼ揃えることで、小中合同で行う交流授業や運動会練習、パリ日発表会練習などスムーズに行うことができ、小中併設校の利点を十分に生かすことができる。45分と50分の調整につきましては、ノーチャイムにして、業間の休み時間や昼食・昼休み時間で調整を行っている。さらに、小学部、中学部

の道徳・特活・総合学習を帯で組みました。その成果として、小学部と中学部の交流授業が実施しやすくなる。

国際人を育成する語学教育の推進につきましては、ネイティブ講師による小学3年生から中学3年生まで英会話の授業をしている。英会話の授業は、小学部の3年生から6年生までは週1時間、中学部では1, 2年生で週2時間、3年生では週3時間設定している。同じくネイティブ講師と日本人講師によるフランス語の授業は、小学1年生から中学2年生まで行っている。また、フランス語学習に意欲のある児童生徒は選択の授業により英語活動か仏語活動どちらかを選択し、フランス語の力をさらに伸ばしていけるようにしている。

パリ日本人学校では各教科の時数確保のうえ、充実した学校行事や語学教育の推進のため、年間202日の授業日数で、小学部では1週間30コマ（小3から小6については、水・金曜日の6時間目は掃除をカットし、60分授業としています）。中学部では33コマでのカリキュラム編成を行っている。

(2) 学校行事

パリ日本人学校の3大学校行事は「運動会」、「パリ日発表会」、「パリ日本人学校まつり」である。「運動会」や「パリ日発表会」は、毎年児童・生徒の主体的な活動につながる有意義な行事となっている。特に小学部5, 6年生や中学部によるパリ日発表会の演技は毎年、児童生徒が自分たちで実行委員を立ち上げ、内容や演出まで自分たちの手で作りあげる為、保護者が楽しみにしている発表の一つとなっている。

また、「パリ日本人学校まつり」は保護者が主体となって運営する行事で児童・生徒がフランスにいながらも、日本のまつりを疑似体験できるとも楽しみにしている行事となっている。これには、現地校交流や社会見学で交流のある学校や施設の方に招待状を送り、普段の児童・生徒や学校の様子を見ていただくいい機会となっている。



(3) 教育課程

「国際人を育成する教育の推進」の一環として前述の様々な体験活動に加え、現地校との交流がある。学校での語学の授業や社会見学の活動は、次に紹介する現地校交流で生かされている。各学年で年間2回以上の「現地校交流」を実施している。それぞれの国の文化を、遊びや会話などのコミュニケーションを通して知ってもらおうという交流であり、児童・生徒はフランスで生活しているものの、現地の人々と接することがあまりないので、とても貴重な時間となっている。国際的な視野を身につけるためには、外国人との交流が必要であり、この交流はとても有意義な活動になっている。中学部では毎年ASP（アメリカンスクール）とバスケットで交流を行い、小学部では近隣の小学校と交流を行っている。



4 成果

パリ日本人学校に派遣されて、3年という短い期間だったが、全国から集まってくる先生方と研修をしていく中で、新しい考え方や指導法が学べた。また、子供たちの人数が少ないので、子供たちの関係性はとても密になりそれが良い影響を与え、学習環境にもいかされていた。

海外で学習している子供たちの多くは、将来海外で仕事をしてみたいと思っている子供が多いのに驚いた。それは、自分たちが日本とは違う環境にすることで、日本の良さや世界の良さに気付いているからだと思う。私が経験したことを日本の子供たちに伝え、多くの子供たちが世界に羽ばたいていくことを願っている。

ミュンヘン日本人国際学校に赴任して

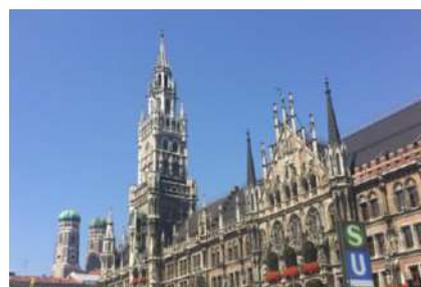
西宮市立浜脇中学校 吉永 真由美

1. 赴任地の概要

ミュンヘンは、ドイツ最大の州バイエルン（英語名ではバヴァリア）の州都でベルリン、ハンブルグに次ぐドイツ3番目の都市である。ミュンヘンはバヴァリアン・アルプスの北から流れ出てドナウ川に注ぎ込むイザール川に面した都市で、比較的中央集権が進んでいるドイツにあって珍しく一極集中型の都市を形成している。

ミュンヘンはアルプス山脈の北から約50Km付近にあり、標高は約520メートル、ノーザン・アルパイン・フォアランドに位置する。アルプス山脈の北の端に位置している関係で降水量は比較的多く、突然のわか雨なども時々ある。気温はその寒暖差が昼・夜、そして夏・冬で大きい。

また、ミュンヘンは「ビールの街」としても知られている。大小多数のビール醸造所が市内にあり、バイエルン州のビール生産量はドイツの2/3を占めている。1年に1度開催される「オクトーバー・フェスト」がよく知られ、世界中から観光客が集まりこの時期が最も多くの旅行客で賑わう。さらに、BMWの本社があり、メルセデス・ベンツ、フォルクス・ワーゲンとともにドイツの自動車産業の牽引役を担っている。



2. 赴任校の概要

ミュンヘン日本人国際学校は、1994年3月、全日制の私立学校としてドイツ・バイエルン州ミュンヘン市に設立された。それ以前には、ミュンヘンには1975年4月に設立された公益法人ミュンヘン日本語補習授業校（Japanisches Institut in München e.V.）があり、同校が毎週土曜日にミュンヘンの駐在員子弟、ないし国際家庭で日本語環境にある子どもたちに対して日本の教育を施し、日本語および日本文化や習慣を教授していた。

在外教育施設のほとんどでそうであるように、本校の児童生徒もその多くが駐在員子弟であり、本校に通う期間はたいてい3～5年である。日本からのみならず、外国からミュンヘンにやってきて、再びまた別の外国またはドイツの都市に転居する児童生徒もいるが、その場合でも、日本人学校から日本人学校へと移動することが多い。また、企業側の事情に伴う子どもの編入・転出は、年度や学期の始まりや終わりだけに限らない。

「主体的に社会の変化に対応できる能力をもった、心身ともに調和のとれた児童生徒の育成」を教育目標に、（1）自ら考え行動できる子の育成（知育）、（2）心配りのできる子の育成（徳育）、（3）たくましい子の育成（体育）などを具体的な柱としている。



3. 特色ある教育実践

（1）ドイツ語授業の設置

ミュンヘン日本人国際学校は、バイエルン州政府からの補助をうける一方で、ドイツ語の授業の提供が義務付けられたほか、他教科でもドイツ語の使用が求められている。これに基づき小学部では、1～2年生には週5時間、3～6年生には週4時間、中学部でも、週3時間のドイツ語の授業（1時間は45分）の実施だけでなく、主に他教科との連携によるドイツ語を使用した現地理解学習が進められている。

また、小学4年生は毎年、地元の警察署の協力により、理論と実地からなる自転車教室が開かれている。このドイツ語の授業数はドイツにある他の日本人学校と比較してもかなり多いことがわかっている。

さらに、ドイツ語講師の数も、3名体制から5名体制に変えられた。この点も他校には見られない特徴である。

（2）現地理解教育

現地理解を進めるために、ドイツ語の授業のほかに、ミュンヘンタイム（MT）という在外特有の教育活動がある。これは、日本の生活科（小1、2）や総合的な学習の時間（小3以上）にあたるもの

で、それぞれの目標である「自分と身近な人々、社会及び自然とのかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせる」および「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること」を踏まえつつ、本校では主にミュンヘンやドイツを知るための地域学習を通して「国際性を持った、世界に貢献できる人物の育成を目指す」ことを目標としている。



例えば、小2のヴィクトアーリエンマルクト見学（苗の買い物）やイチゴ狩りは生活科と、小3のミュンヘン市内見学や消防署見学、小4の貯水場見学やプラネタリウム見学、小5のBMW見学やバイエルン放送見学、小6の化石堀りなどは社会や理科などの教科に関連したものであり、ほぼ毎年実施している。一方で、担任教員が学級の実態から児童生徒にどのような力をつけたいと考えるか、または学習の重点をどこに置くかによって、別の訪問先を選ぶこともありうる。例えば、2016年度には小5が、社会科の「日本の農業～米作り～」の単元から発展させ、ミュンヘン郊外にあるホップ農場やホップ博物館を見学した。

無論、MTは校外学習に限らない。ドイツ語教員の協力のもと、教室で校外学習の事前や事後学習を行ったり、ゲストティーチャーを呼んで現地理解を深めたりすることもMTの活動である。ゲストティーチャーの例では、2017年度に小4の社会「特色ある地域の産業」の枠内で、本校の保護者でバイオリン製作者の方に来ていただき、バイオリン作りの歴史や材料、道具について説明をしていただいた。また、小学部5・6年生および中学部を対象に、国立ドイツ博物館にも展示紹介されている有名な日本人物理学者の先生をお呼びして、キャリア教育の一環として講演会を実施した。

さらに、8月に小5・中1・2の3学年で行う宿泊学習や、12月のクリスマスマルクト見学や2月のファッシング見学（ドイツ版カーニバル）など、現地にいるからこそできる体験活動も多く実施されている。

（3）現地校交流会

各学年ともに現地校の児童生徒と年2回程度の交流を行っている。一度目は、相手校の児童生徒がミュンヘン日本人国際学校を訪問し、日本文化の紹介や昔遊びを一緒に行う。また、ドイツの学校では1・2時間目が終わると、パウゼ（間食）の時間が設けられており、その時間を使って「おにぎり」や「おもち」などの日本食を一緒に調理する。二度目は、相手校を訪問し、ドイツ文化などについて学ぶ。

（4）文化祭（ドイツ語学習発表会）

毎年、秋に行われる文化祭では各学年がドイツ語劇を行う。内容は様々で、「はてしない物語」「ジム・ボタンの冒険」などのドイツで有名な文学作品や「走れメロス」「おむすびころりん」などの国語の授業で扱われている作品、またMT学習で学んだことをもとに、オリジナルのシナリオを作成することもある。いずれの場合も、夏休み前からドイツ語教員と連携し、作品を仕上げている。



（5）ICT教育

ミュンヘン日本人国際学校では、被服室や図工室、体育館などの特別教室も含め、全ての教室に電子黒板が設置されている。（ただし、体育館は可動式のを体育倉庫においてある。）wi-fi環境も整備され、どの教室でもインターネットを利用することが可能である。社会科や国語の調べ学習やプレゼンテーションで大いに活用されている。

4. 成果

日本人学校の子どもたちも学校内では元気に挨拶をしているが、いざMT学習や現地校交流会でドイツ語を話すとなると積極性がなくなる。しかし、本心では「ドイツ人の友だちをたくさん作りたい。」「もっとドイツ語が上手になりたい。」と思っている児童生徒は多い。

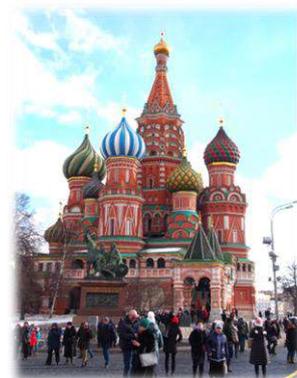
言葉や通じたとき、コミュニケーションが図れたときの喜びは語学を取得する上で、大きな動機付けとなることを改めて実感した。今回の経験を活かし、子どもたちが様々な場面で、自信を持って自己表現できる力を育てていけるような授業実践を行っていききたい。

モスクワ日本人学校に赴任して

尼崎市立武庫中学校
松田 賢

1 ロシアの概要

ユーラシア大陸北部に位置し、アジア州とヨーロッパ州にまたがる、面積約 1,710 万 Km² (日本の約 45 倍、世界の陸地の 11.5% を占める) の世界一広大な国土を有する国である。広大な面積を持つロシアでは、現在 11 の標準時が使われている。ロシアの気候は、大部分が冷帯気候に属するが、地域によっては温帯気候、ステップ気候、寒帯気候と多様である。2017 年 1 月現在のロシアの人口は約 1 億 4,680 万人 (世界第 9 位) であり、首都モスクワには 1,238 万人が暮らしている。世界有数の多民族国家であるロシアには、様々な言語、宗教、文化があるのも大きな特徴である。



政治的には、2018 年の大統領選挙で再選を果たしたプーチン大統領による長期政権が続いている。2014 年に起きたクリミア半島のロシアへの編入やシリア問題への介入などにより、欧米諸国との対立が続いている情勢もあり、治安的に危険な地域とされているが、実際にモスクワで暮らしてみると、大半のロシア人は日本人に対して好意的である。また、ロシアでは幼稚園・保育所といった社会的な育児支援施設が充実しているという点も驚きであった。幼稚園は、一学級につき複数の担任制で構成されており、クラスでの授業以外に、体育・音楽・美術・工作・ポエム・算数などを移動教室で専門の教員が担当して行っている。また、季節ごとの行事も多く、外部のバレエ団が来校して公演をしてくれる機会もある。なによりも驚いたのは、ロシアの教育費の安さである。通常、7:30 頃に登校し、朝食・昼食・おやつ・夕食と昼寝の時間もあり、18:00 頃に下校するまで過ごす時間は日本に比べるとかなり長時間になる。このような滞在時間であっても、1,000 rub - 1,500 rub/月 (1 rub = 約 1.9 円) ぐらいである。時間的にも経済的にも、幼児教育にかかる各家庭の負担が少なくとても暮らしやすい国であった。

2 モスクワ日本人学校の概要

モスクワ日本人学校は、2017 年に創立 50 周年を迎えた、ヨーロッパで最も古い歴史をもつ日本人学校である。1967 年 10 月に全校児童 16 名で開校したが、数年は学校としての建物の確保が最優先とされ移転を繰り返し、10 年後の 1977 年 10 月 15 日に現在の場所に校舎を移転している。

現在の児童生徒数は約 130 名で、小学部と中学部が共に行動する行事も多く、学年の壁を越えたつながりが強いことがモスクワ日本人学校の魅力の一つである。また、同じ建物にイタリア校やフィンランド校、スウェーデン校が入っており、スポーツ交流や文化交流も積極的に行っている。モスクワ日本人学校では、現地理解教育の一環として、ロシア語の学習を取り入れている。現地採用の講師の指導のもと、各学年で進度別に 3 クラスに分かれて行う。学習の内容として、初級クラスでは、ロシアの文字である『キリル文字』の練習や基本的な単語、日常使われるあいさつ等を学習している。初級や中級のほとんどの児童生徒がロシア語を全く分からない状態からのスタートとなるが、一年ほどの学習で基本的なあいさつをしたり、文字を読んだりすることができている。

3 特色ある教育実践

(1) 現地理解教育

モスクワ日本人学校では、小学部・中学部とも年 2 回の現地校交流会を行っている。2 回のうち 1 回は現地校を訪問し、もう 1 回は現地校の児童生徒を招いて交流活動を行っている。昨年度小学部が交流を行った「1471 番校」は、4 年生から「日本語教育」のカリキュラムが組まれており、日本の文化に興味を示す児童が多かった。現地校の児童生徒を招くときは、週 1 度行われているロシア語の授業と連動させ、日本の伝統的な行事や遊びをロシア語で紹介するなど、実際に児童生徒同士が交流する機会をできるだけ多く取り入れた。

習字教室



(2) 修学旅行

① 小学部

小学部は、5・6年生が合同で行い、行先は『サンクトペテルブルグ』と『ウラジーミル・スーズダリ』を隔年で行っている。サンクトペテルブルグは、主に歴史的建造物や美術品などを鑑賞することで、現地の文化を理解することを目的としている。ウラジーミル・スーズダリは、体験的な活動を中心に、伝統的な工芸品づくりなどを行うことで、現地の文化を理解することを目的としている。事前学習として見学する建築物や関連する人物などについてグループごとに調べ、ガイドブック作りを行った。



ピョートル大帝 夏の離宮

② 中学部

中学部の修学旅行は、3学年合同で行っている。行先は、ドイツ、リトアニア、チェコなどを学習内容に応じて選択して行っている。修学旅行では、歴史的建造物などを訪れるだけでなく、平和学習の機会と捉えて事前学習から取り組んでいる。ドイツではベルリンの壁やポツダム会談が行われた場所を訪れるなど、第二次世界大戦から冷戦時代に至るまでの歴史を学んだ。リトアニアでは、杉原千畝氏に関する学習を中心に、ユダヤ人への迫害などについて学習を深めるとともに、第9要塞を訪れて当時の収容所の厳しさを感じるなど、現地に赴かないとすることができない貴重な経験となった。



リトアニア 第9要塞

修学旅行後には、ロシアのユダヤ人学校の学生との交流を行う機会もあった。また、中学部では修学旅行で学んだことを秋の学習発表会で劇として表現するなど、年間を通じて平和について学ぶ機会を設けている。

(3) 教育講演会

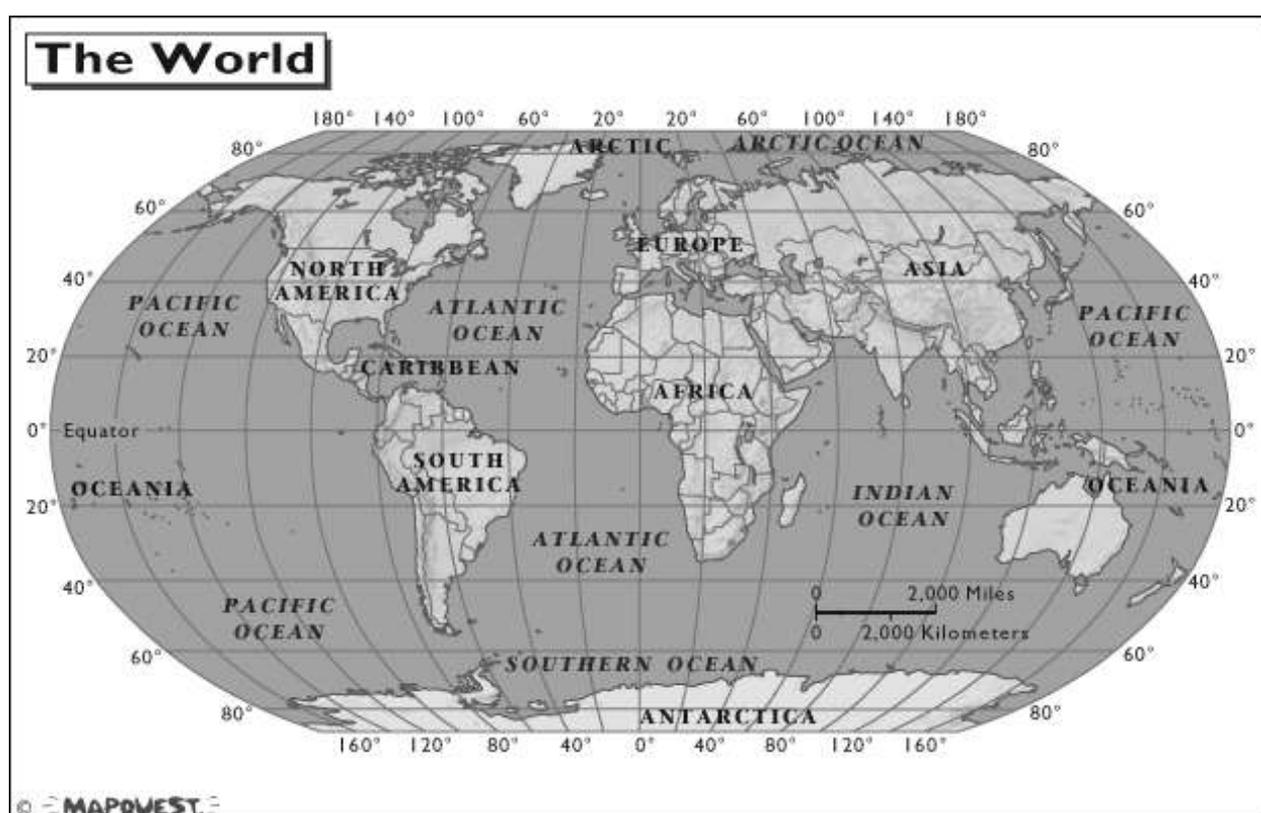
モスクワ日本人学校では、様々な分野で活躍をしている方を招いて定期的に教育講演会を実施している。昨年度は、宇宙飛行士として国際宇宙センターで活動された油井亀美也氏に講演をしていただき、実際に宇宙に行かれた時の話や夢についての話をしていただいた。その他にも、ロボットクリエイターとして世界の舞台で活躍をする高橋智隆氏からは、仕事に対する考え方などを話してもらうなど、子ども達にとってはとても貴重な機会となっている。

4 成果

モスクワへの赴任が決まった時は、日本の報道で伝わるロシアのイメージや、生後間もない子どもを連れての海外生活ということもあり、正直不安な気持ちの方が強かった。しかし、実際にモスクワでの3年間の生活を終えてみると、最初に覚えた不安は何だったのかと思うくらい充実した日々を過ごすことができた。職場では、日本各地から集まってきた新しい仲間に出会い、同じ目標に向かい歩むことができた。また、言語や宗教、習慣、思想も違う国で生活することで、良い意味で日本的な感覚にはないものに触れる機会がたくさんあり、自分自身の見識や感性が磨かれたように感じる。美術館に行けば、親や祖父母が子ども達に絵画の説明をしながら歩いている光景や、週末になれば近隣の公園に出かけてスケートやそり遊びを楽しんでいる姿をよく見かけた。私自身が幼い長女連れて歩いていれば、「寒いから手袋をさせないとダメだ」と注意やアドバイスを受けることもあった。当たり前のように、目の前に困っている人がいれば手を貸してくれるロシアの人々の優しさに触れ、家庭や地域での教育力や繋がり大切さを再確認できたことも大きな財産となっている。

今回、日本からモスクワへ派遣をしていただき、3年間という貴重な経験を積んだことで、今まで見えなかったことや感じられなかったことが多くあることに気が付いた。さらには、日本を外から見ることで、国際社会における日本の評価や日本の良い部分を再発見できたこともとても新鮮であった。3年間支えていただいたすべての方々に感謝の気持ちを持ちつつ、学んだことを今後の教育活動にぜひともいかしていきたい。

《活動状況》



活 動 状 況 目 次

平成 30 年度 兵庫県在外教育施設派遣教員一覧	35
兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織	36
平成 29 年度 事業報告	37
平成 29 年度 多文化共生・国際教育セミナー実施報告	38
平成 30 年度 事業計画	39
平成 30 年度 多文化共生・国際教育セミナー計画書	40
兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則	41
兵海研 入会申込書	43

□■ 本年度 帰国 ■□

本年帰国

■ 2015(H27)年度派遣 ■(派遣時22名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
高木 智子	ソコポール	ソコポール(小)	加古川	野口南小
西 康滋	タイ	バンコク	神戸	北神戸中
神脇 貴子	中国	深セン	姫路	家島小
佐々 順子	中国	上海(浦東)	神戸	有野小
金谷 亜姫	ベトナム	ハノイ	神戸	西神中
兼山 三吾	ベトナム	ハノイ	神戸	シニア派遣
三輪 信之	台湾	台中	神崎	神河中
有富 謙悟	アメリカ	ニューヨーク	伊丹	伊丹小
河田 武志	オランダ	ロッテルダム	明石	江井島中
吉永 真由美	ドイツ	ミュンヘン	西宮	脇浜中
村上 貴士	フランス	パリ	神戸	井吹の丘小
松田 賢	ロシア	モスクワ	尼崎	武庫中
福本 俊也	UAE	ドバイ	小野	小野中
上阪 浩一	カタール	リヤド	姫路	神南中
細見 隆昭	トルコ	イスタンブール	丹波	新井小
梅田 博之	パレーン	バハレーン	西宮	脇浜小
大西 正展	アイルランド	ダブリン補【長】	神戸	シニア派遣



□■ 本年度 新規派遣 ■□

派遣1年目

■ 2018(H30)年度派遣 ■(派遣時29名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
小林 悦子	インド	ニューデリー【頭】	たつの	室津小
宗倉 等	インド	ニューデリー	神戸	シニア派遣
加藤 裕章	インドネシア	ジャカルタ	宝塚	安倉小
田邊 晃子	インドネシア	パトナ	芦屋	宮川小
應供 亮生	ベトナム	ハイ	豊岡	日高西中
内田 琢也	ベトナム	ホーチン	加古川	別府西小
倉垣 尚恵	ソコポール	ソコポール(チャギ)	丹波	崇広小
尾鼻 祐也	中国	北京	宍粟	波賀小
内田麻杏舞	中国	上海(虹橋)	神戸	長坂小
村崎 千鶴	中国	上海(虹橋)	芦屋	シニア派遣
沖田真理子	中国	上海(浦東)	尼崎	シニア派遣
貝畑 健太	パキスタン	イスマバード	尼崎	水堂小
稲留 博史	マレーシア	クアラルンプール	尼崎	園田小
高崎 雅子	マレーシア	ジョホール	猪名川	猪名川中
福原くみこ	台湾	台北	神戸	長坂中
橋 真希	アメリカ	ニューヨーク	加古川	平岡北小
川邊 満久	メキシコ	グアダハラハラ	神戸	西郷小
原田 真弥	オーストリア	ウィーン	神戸	蓮池小
清水 圭介	オランダ	アムステルダム	明石	山手小
東 明彦	スイス	チューリッヒ【長】	丹波	シニア派遣
宮本千香代	イギリス	ロンドン	伊丹	摂陽小
小阪 学史	ロシア	モスクワ	尼崎	杭瀬小
井川 信也	オーストラリア	シドニー【長】	三田	シニア派遣
衛藤 理佐	オーストラリア	シドニー	伊丹	天神川小
高田 顕子	オーストラリア	メルボルン	姫路	網干中
今井 省悟	カタール	ドoha	伊丹	笹原小
富田 貴也	サウジアラビア	リヤド	川西	東谷中
荻野 俊也	チェコ	プラハ	丹波	シニア派遣

□■ ただいま奮闘中 ■□

派遣3年目

■ 2016(H28)年度派遣 ■(派遣時22名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
耳田 由美子	ソコポール	ソコポール(チャギ)	赤穂	尾崎小
藤谷 奈穂	ソコポール	ソコポール(中)	神戸	雲中小
加賀 悠士	タイ	バンコク	明石	清水小
森安 祥平	タイ	バンコク	多可	八千代小
肥後 綾子	中国	香港(中)	西宮	上甲子園中
飯塚 恵子	ベトナム	ハノイ	川西	緑台中
田中 良枝	マレーシア	ペナン	姫路	菅野中
渡辺 裕史	台湾	台北	神戸	玉津中
矢野 博之	コスタリカ	サン・ホセ	西宮	段上小
樹下 幸代	コロンビア	ボゴタ	播磨	播磨中
永田 博己	メキシコ	メキシコ【長】	姫路	シニア派遣
水井 廉雄	イタリア	ローマ【長】	篠山	シニア派遣
前田 隆吾	スイス	チューリッヒ	三木	上吉川小
村山 次郎	スペイン	マドリッド	丹波	芦田小
黒田 智広	チェコ	プラハ	神戸	魚崎小
織田 真弘	イラン	テヘラン	姫路	夢前中
稲中 伸彦	ケニア	ナイロビ	宝塚	宝塚中
祢津 明信	アメリカ	ニュージャージー【頭】	神戸	有馬中
中野 龍文	アメリカ	シアトル補【長】	篠山	西紀南小
中田 公平	オランダ	アムステルダム	宝塚	宝塚第一小

□■ ただいま奮闘中 ■□

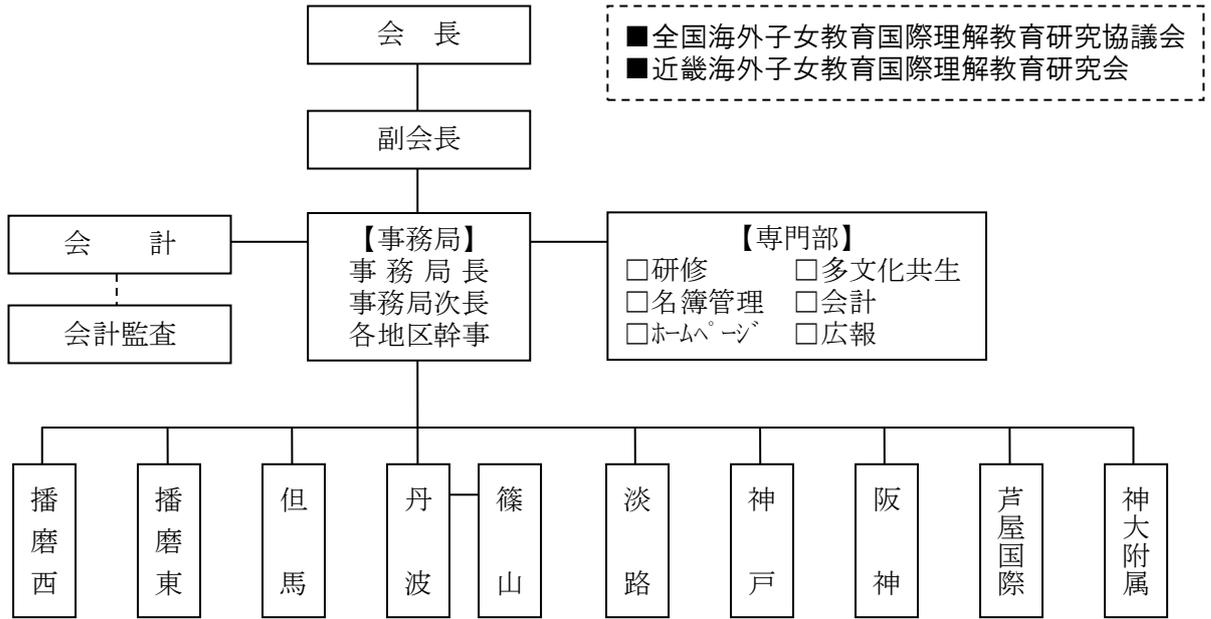
派遣2年目

■ 2017(H29)年度派遣 ■(派遣時25名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
増田 恵津子	インドネシア	ジャカルタ	明石	高丘中
篠原 功二	インドネシア	ジャカルタ	川西	北稜小
中村 陽希	タイ	バンコク	加古川	加古川中
林 由加子	タイ	バンコク		
西村 一将	中国	天津	加古川	別府西小
河野 真也	中国	広州	南あわじ	三原中
吉田 菜由	中国	深圳	神戸	魚崎小
山本 佳奈	中国	上海(虹橋)	宝塚	丸橋小
加来 亮平	中国	上海(浦東)	西宮	上甲子園中
長江 麻里子	中国	蘇州	播磨	蓮池小
大西 一人	中国	杭州【長】	神戸	広陵中
崎田 真宏	中国	大連	篠山	八上小
榎本 龍	フィリピン	マニラ	神戸	上野中
齊藤 真実	ベトナム	ホーチミン	神戸	渦が森小
白根 佐知子	アメリカ	シカゴ	明石	鳥羽小
久保田 信	アルゼンチン	ブエノスアイレス	丹波	柏原中
岸本 紗矢子	アルゼンチン	ブエノスアイレス	神戸	兵庫中
小野寺 裕美	ブラジル	マナウス	明石	山手小
北野 貴誠	イタリア	ミラノ	尼崎	大成中
菅原 庸介	ドイツ	デュッセルドルフ	伊丹	天神川小
西尾 由紀子	ドイツ	デュッセルドルフ	加古川	綾南中
薩地野 左智	ドイツ	ミュンヘン	西宮	大社中
古川 英治	ベルギー	ブリッセル【頭】	淡路	江井小
竹山 森太郎	カタール	ドoha	相生	双葉小
仲 順也	カナダ	トロント補【長】	伊丹	シニア派遣

平成 30 年度

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織



会長	足立 浩	事務局長	中井 治嗣
副会長	大月 祐三(研修)	事務局次長	原田 英聖(組織・渉外)
	小畑 幸一(組織)		小池 宏尚(渉外)
	高木 浩志(研修)		田中 秀滋(研修)
	八幡 良一(帰国報告会)		島多 峰史(研修)
	松本 肇仁(帰国報告会)		塚本 与久(研修)
会計	二谷 洋平		徳野 雅信(研修)
研 修	上阪 浩一(帰国報告会)		二谷 洋平(組織)
	小谷 仙嘉(帰国報告会)		松田 一樹(組織)
	中澤 大樹(セミナー)		矢野 越史(組織)
	田中 秀滋(セミナー)		名簿管理
	山下 昌裕(セミナー)	ホームページ	二谷 洋平
多文化共生 (教育相談)	貞松 千佳子	原田 英聖	
監事	島多 峰史	小池 宏尚	
	照本 忠光、中馬 義治	広報	佐々 順子
			西口 美希

地 区 幹 事			
神 戸	徳野 雅信、榎戸 二郎	播磨西	檜野正樹・小谷仙嘉
阪 神	岡坂 隆志、山村裕二、杉本 裕司	播磨東	水田 良
丹 波	梅垣 泰三、伊藤 憲司、西田 隆之	但 馬	中沢 泰明、大月 祐三
篠 山	小嶋 拓也、浅田 智之、中野 純也	淡 路	美濃 正明、立田 和弘
芦屋国際中等	貞松 千佳子	神大附属小	福島 麻衣

顧問	谷口 哲、生野 康一、橋本 力、茶谷 紀元、青木 芳信 横田 政美、西田 富男、水岡 俊一、串光 宏治、森本 孝 榎田 邦夫、丸山 一則、中馬 義治、宮田 正彦、照本 忠光		
海外幹事	永田 博己、藤本 孝仁、水井 廉雄、仲 順也、大西 一人		
全海研顧問	生野 康一	全海研副会長	高木 浩志
全海研事務局次長	原田 英聖	全海研研修担	事務局長

平成 29 年度 事業報告

1 活動方針

『21 世紀の多文化共生に向けて』 ～派遣経験をいかに活かすか～

- ① 帰国教員の海外経験を活かした帰国子女・国際理解教育の推進
 - ・ 派遣志望者、シニアへの研修活動
 - ・ 多文化共生・国際教育セミナーの実施
- ② 一般教員・保護者への外国人・海外子女・国際理解教育の啓発
- ③ 兵海研活動の活性化
 - ・ 帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行）
 - ・ 各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
- ④ 全海研全国大会（長野大会）への参加
- ⑤ 近畿ブロック大会（京都大会）への協力/参加

2 事業計画

- (1) 総会・歓迎会 5/6(土) 県立のじぎく会館
- (2) 帰国報告会 6/11(土) JICA 関西
- (3) 多文化共生・国際教育セミナー（派遣志望者研修会）

第 1 回	5/6(土)	『海外子女教育の概論』	(場所: 県立のじぎく会館)
第 2 回	6/11(土)	【帰国報告会】	(場所: JICA 関西)
第 3 回	10/28(土)	【近畿ブロック大会】	(場所: 京都市)
第 4 回	12/16(土)	『在外教育事情緊急報告』	(場所: 神戸市勤労会館)
第 5 回	2/24(土)	『保護者の目・派遣 OB を交えて』	(場所: 県立のじぎく会館)

 その他、各地区の研修会
- (4) 派遣教員激励会
- (5) 各地区研修会・実践交流会…各地区の特色を生かして 「国際理解教育研修会」
- (6) 帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成
 - 会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
 - 会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。
- (7) 広報・編集
 - ① ホームページの更新、充実（アドレス <http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>）
 - ② 海外から実践報告、兵海研諸活動は、今後 HP 上で（またはデジタル化）発信
- (8) 全海研近畿ブロックとの連携
- (9) 全海研本部との連携 全国大会（長野：長野市生涯学習センタ） 8/3(木)～6(日)
- (10) その他の活動
 - ・ 兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
 - ・ 派遣教員への情報提供と教材支援
 - ・ 在外教育施設教育事情視察
- (11) 関係諸団体との連携

<ul style="list-style-type: none"> ・ 兵庫県教育委員会（人権教育課、子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校） ・ 各市町教育委員会 ・ 兵庫県国際交流協会、JICA 関西 ・ 帰国子女教育を考える会 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所） ・ （公財）海外子女教育振興財団関西分室 ・ 関西帰国生親の会かけはし ・ 兵庫 OV 教員研究会
---	--

平成29年度 多文化共生・国際教育セミナー報告書

下記の表のように5回の研修会を行いました。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第1回	5月6日（土） 10:00～12:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通 4-22-15)	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：足立 浩
第2回	6月24日（土） 10:00～17:00 JICA関西 (神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2)	帰国報告会 2016年度帰国教員による活動報告 青年海外協力隊員による活動報告 他
第3回	10月28日（土） 14:00～16:00 京都市生涯学習総合センター山科 (京都市山科区竹鼻竹ノ街道町 92 番地)	第28回近畿ブロック国際理解教育研究会 京都大会 国際理解教育 現地理解教育 多文化共生教育
第4回	12月16日（土） 13:00～16:00 神戸市勤労会館 (神戸市中央区雲井通 5丁目 1-2)	研修1 「日本人学校の現状と課題」 講師 八幡 良一 研修2 「派遣に向けての情報交換」 派遣決定これからの準備について 講師 元在外教育施設派遣教員
第5回	2月24日（土） 10:00～12:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通 4-22-15)	「在外派遣を考える～配偶者の立場から～」 講師：関西帰国生親の会かけはし 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員OBを交えて～ 講師：兵海研会員（元在外教育施設派遣教員）

平成30年度 事業計画

1 活動方針

『21世紀の多文化共生に向けて』 ～派遣経験をいかに活かすか～

- ① 帰国教員の海外経験を活かした帰国子女・国際理解教育の推進
 - ・ 派遣志望者、シニアへの研修活動
 - ・ 多文化共生・国際教育セミナーの実施
- ② 一般教員・保護者への外国人・海外子女・国際理解教育の啓発
- ③ 兵海研活動の活性化
 - ・ 帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行）
 - ・ 各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
- ④ 全海研全国大会(千葉大会)への参加
- ⑤ 近畿ブロック大会(滋賀大会)への協力/参加

2 事業計画

- (1) 総会・歓迎会 5/5(土) 兵庫県民会館
- (2) 帰国報告会 6/16(土) 姫路市市民会館
- (3) 多文化共生・国際教育セミナー（派遣志望者研修会）

第1回	5/5(土)	『海外子女教育の概論』	(場所:兵庫県民会館)
第2回	6/16(土)	【帰国報告会】	(場所:姫路市市民会館)
第3回	10/27(土)	【近畿ブロック大会】	(場所:滋賀県)
第4回	12/22(土)	『在外教育事情緊急報告』	(場所:県立のじぎく会館)
第5回	2/23(土)	『保護者の目・派遣OBを交えて』	(場所:県立のじぎく会館)

 その他、各地区の研修会
- (4) 派遣教員激励会
- (5) 各地区研修会・実践交流会…各地区の特色を生かして 「国際理解教育研修会」
- (6) 帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成
 - 会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
 - 会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。
- (7) 広報・編集
 - ① ホームページの更新、充実（アドレス <http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>）
 - ② 海外から実践報告、兵海研諸活動は、今後HP上で（またはデジタル化）発信
- (8) 全海研近畿ブロックとの連携
- (9) 全海研本部との連携 全国大会（千葉:千葉教育会館） 8/9(木)～11(土)
- (10) その他の活動
 - ・ 兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
 - ・ 派遣教員への情報提供と教材支援
 - ・ 在外教育施設教育事情視察
- (11) 関係諸団体との連携
 - ・ 兵庫県教育委員会（人権教育課、子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
 - ・ 各市町教育委員会
 - ・ 兵庫県国際交流協会
 - ・ 帰国子女教育を考える会
 - ・ 兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
 - ・ （公財）海外子女教育振興財団関西分室
 - ・ 関西帰国生親の会かけはし
 - ・ 兵庫OV教員研究会

平成30年5月吉日

関係各位

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会
会 長 足 立 浩

平成30年度 多文化共生・国際教育セミナー計画

下記の表のように5回の研修会を計画しております。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第1回	5月5日（土） 14:00～17:00 兵庫県民会館 (神戸市中央区下山手通4-16-3)	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：足立 浩
第2回	6月16日（土） 10:00～17:00 姫路市市民会館 (姫路市総社本町112番地)	帰国報告会 2017年度帰国教員による活動報告 青年海外協力隊員による活動報告 他
第3回	10月27日（土） 14:00～16:00 滋賀県立男女共同参画センター (近江八幡市鷹飼町80-4)	第29回近畿ブロック国際理解教育研究会 滋賀大会 国際理解教育 現地理解教育 多文化共生教育
第4回	12月22日（土） 14:00～16:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通4-22-15)	内容:在外教育施設での多文化共生について。(予定)
第5回	2月23日（土） 10:00～12:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通4-22-15)	「在外派遣を考える～配偶者の立場から～」 講師：関西帰国生親の会かけはし 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員OBを交えて～ 講師：兵海研会員（元在外教育施設派遣教員）

上記の予定の変更点は、下記ホームページにてお知らせします。

ホームページアドレス

<http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>

【 お問い合わせ先 】

兵海研事務局

中井 治嗣

Email: hyo1982kai@gmail.com

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則

■第一章■

第一条 本会は兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（略称；兵海研）と称する。

■第二章■ （目的および事業）

第二条 本会は国際的視野にたった海外子女教育および国際理解教育の充実発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 海外子女教育・国際理解教育に「関する研究の推進
2. 海外子女教育・国際理解教育にかんする研究会、交流会の開催
3. 海外子女教育に関する教育相談の実施
4. 会員相互の情報交換を行うための会報の発行
5. 在外教育施設に派遣中の教師に対する情報交換や援助
6. 全国海外子女教育国際理解教育研究協議会との連携に基づく活動
7. その他 本会の目的を達成するために必要な事業

■第三章■ （会員）

第四条 本会の会員は在外教育施設に派遣された者および本会の趣旨に賛同する者で年会費を納入した者で構成する。派遣時に年会費を納入した者は、3年間準会員として本会から連絡等を受けることができるものとする。

■第四章■ （役員）

第五条 本会には次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 事務局長 1名
4. 事務局次長 若干名
5. 会計部長 1名
6. 専門部長 若干名
7. 地区幹事 若干名
8. 幹事 2名
9. 顧問

第六条 役員は総会において選任される。

第七条 会長は本会を代表し会務を総括する。

副会長は会長を補佐し、会長に事故のあるときはその任を代行する。

事務局長は本会に関する事務を行う。

事務局次長は事務局長を補佐する。

会計部長は本会の会計の事務を行う。

専門部長は各専門部の活動を推進する。

地区幹事破竹の会員をまとめ、地区の活動を推進する。

幹事は本会の会計を監査する。

顧問は必要に応じて置くことができる。

第八条 役員任期は1年とする。但し再任は妨げない。

補欠により選任された役員の任期は前任者の在任期間とする。

第九条 本会は事務局を事務局長の勤務場所に置く。

■第五章■ (機関)

第十条 本会に次の機関を置き、会長がこれを召集する。

1. 総会
2. 役員会

第十一条 総会は毎年1回召集する。但し必要に応じて臨時に召集することができる。
役員会は必要に応じてこれを召集する。

第十二条 総会は次の事項を審議する。

1. 事業計画
2. 予算および決算
3. 会則の変更
4. その他 必要事項

※緊急かつやむを得ない事情により総会を開くことができないときは役員会の決議をもってこれにかえることができる。この場合は該当事項について、次回の総会で承認を得なければならない。

第十三条 役員会は次の事項を審議する。

1. 総会での審議を要しない事項で、本会の運営に関する事項
2. 総会に提案する議案の検討
3. その他 会長が必要と認める事項

■第六章■ (会計)

第十四条 本会の費用は会費・寄付金・その他の収入をもってこれにあてる。

第十五条 本会の会費は年額3000円とする。

第十六条 本会の会計年度は、毎年総会に始まり、翌年の総会の前日に終わるものとする。

(この会則は昭和57年9月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、昭和62年6月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成元年6月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成3年6月2日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成8年5月25日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成9年5月24日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成11年5月8日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成15年5月10日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成24年5月6日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成30年5月5日から施行する)

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会(兵海研)入会のご案内

私たち兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（兵海研）は、兵庫県内の小中学校教員が中心となって組織している研究団体です。県内の国際理解教育や帰国子女教育・多文化共生教育、また、派遣教員による海外子女教育の充実・発展をめざして精力的に活動しています。ぜひ兵海研に入会し、一緒に学び合いませんか。

【 会員特典 】

- 兵海研が主催する各種セミナーに、無料でご参加いただけます。
- 兵海研からの情報（セミナー案内、派遣先関連等）を提供いたします。
- 兵海研の海外子女教育、国際理解教育に関わるネットワークにご参加いただけます。

【 主な活動 】

- 国際教育セミナー（在外教育施設派遣希望者研修会）
- 在外教育施設帰国教員による帰国報告会（海外教育事情等）
- 派遣教員激励会、帰国教員歓迎会の企画
- 近畿ブロック国際理解教育研究大会
- 在外教育施設派遣教員への支援活動
- 文部科学省内定者研修（東京）での兵庫連絡会
- 県内各地域での国際理解教育・多文化共生教育実践交流
- HPによる活動報告や国際理解教育関連の情報提供 等

【 会 費 】

年会費 3,000円（会場費や資料代に使います）

※ ネットワークや案内情報に活用しますので、下記『兵海研入会申込書』と共に納入してください。

◆郵便振替 名義 兵庫県海外子女教育国際理解教育研究会

口座番号 0900-7-94943

【 連絡先 】

事務局 中井 治嗣（ナカイ ハルツグ）

E-mail: hyo1982kai@gmail.com

川西市立川西養護学校（〒666-0143 兵庫県川西市清和台西 2-3-81）

TEL 072-799-3418 / FAX 072-799-5413

キリトリ

兵海研入会申込書

平成 30 年 月 日

お名前		現所属	
海外との関係		E-mail	

※ 海外との関係（例：H24～カラチ日本人学校 or 日本人学校に興味あり）